

額見町遺跡発掘調査報告書 VII

倉庫増築に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

2025. 1

株式会社 内村

石川県小松市埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は石川県小松市において小松市埋蔵文化財センターが実施した額見町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 試掘調査は、文化庁補助を受けて実施し、発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、株式会社内村の費用負担により実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。

[調査地] 石川県小松市額見町

[調査原因] 倉庫増築工事

[試掘調査] 平成28年7月11日～平成28年7月15日

[試掘担当] 宮田 明

[調査面積] 約1,500m²

[調査期間] 令和5年8月21日～令和5年12月4日

[調査担当] 村上 昂之、本田 秀生(会計年度任用職員)

4. 発掘調査は、臨時作業員を雇用して実施した。
5. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して令和6年度に実施した。
6. 遺構の実測及び写真撮影、遺物の写真撮影は調査担当者が行った。また空撮写真については株式会社太陽測地社より提供を受けた。
7. 本書の編集は村上が担当し、Ⅲ章第3項については望月が、その他は村上が担当した。
8. 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市埋蔵文化財センターで一括保管している。
9. 発掘調査及び報告書作成に当たっては、次の機関、団体のご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

株式会社内村

凡 例

1. 本書に示す座標は平面直角座標VII系、高度は標高(T.P.)で表示し、世界測地系「測地成果2011」に準拠している。
2. 本書に示す方位は、特に断りがない限り、座標北である。
3. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。

目 次

I 経緯と概要	1
II 位置と環境	4
III 調査成果	7

写真図版 1～8

報告書抄録

第Ⅰ章 経緯と概要

第1節 調査に至る経緯

本遺跡は、昭和 56 年度に石川県教育委員会が実施した、県内詳細分布調査で新たに発見された。当地は古くから、良質な山砂が採掘できる地とも知られ、今江潟や柴山潟の干拓のための土砂として、台地縁辺部、特に北側の台地部分は広い範囲で削平を受けていた。また、昭和初期には、台地のほぼ全域が田地確保のための耕地整理が行われており、起伏のある地形は切土、盛り土により段状に平坦化されていた。

その後、平成 6 年度に小松市が計画した串・額見地区産業団地造成事業に伴い、小松市教育委員会が主体となり試掘調査が行われ、対象区域内に多数の竪穴住居が存在することが確認された。そして平成 7 年～12 年にかけて石川県埋蔵文化財センター調査分を合わせて、38,500m²を対象に発掘調査が行われた。調査によって 7 世紀～12 世紀にかけての竪穴建物 119 軒、掘立柱建物 330 棟、土坑 424 基（うち土師器焼成坑 10 基、製炭土坑 7 基、墓坑 15 基以上）、炉状遺構（うち鍛冶炉跡 12 基）、井戸 3 基、溝状遺構 53 条（うち道路状遺構 5 本）、集石遺構 2 基、他に土器溜まり遺構を 20 か所以上で確認した。

今回調査の対象地は、市有地の保存地区として未調査で保存されていたが、市有地の売却の計画が浮上し、平成 28 年 7 月 11 日～15 日にかけて試掘調査を実施した。その結果、保存地区内に遺跡の残存を確認した。その後、土地を購入した株式会社内村より倉庫増築工事に係る協議があり、令和 3 年 5 月 18 日付けで協議書の提出を受けた。協議の結果、建物の基礎の影響範囲である 1,500m²を対象として、原因者負担により発掘調査を行うことで合意した。

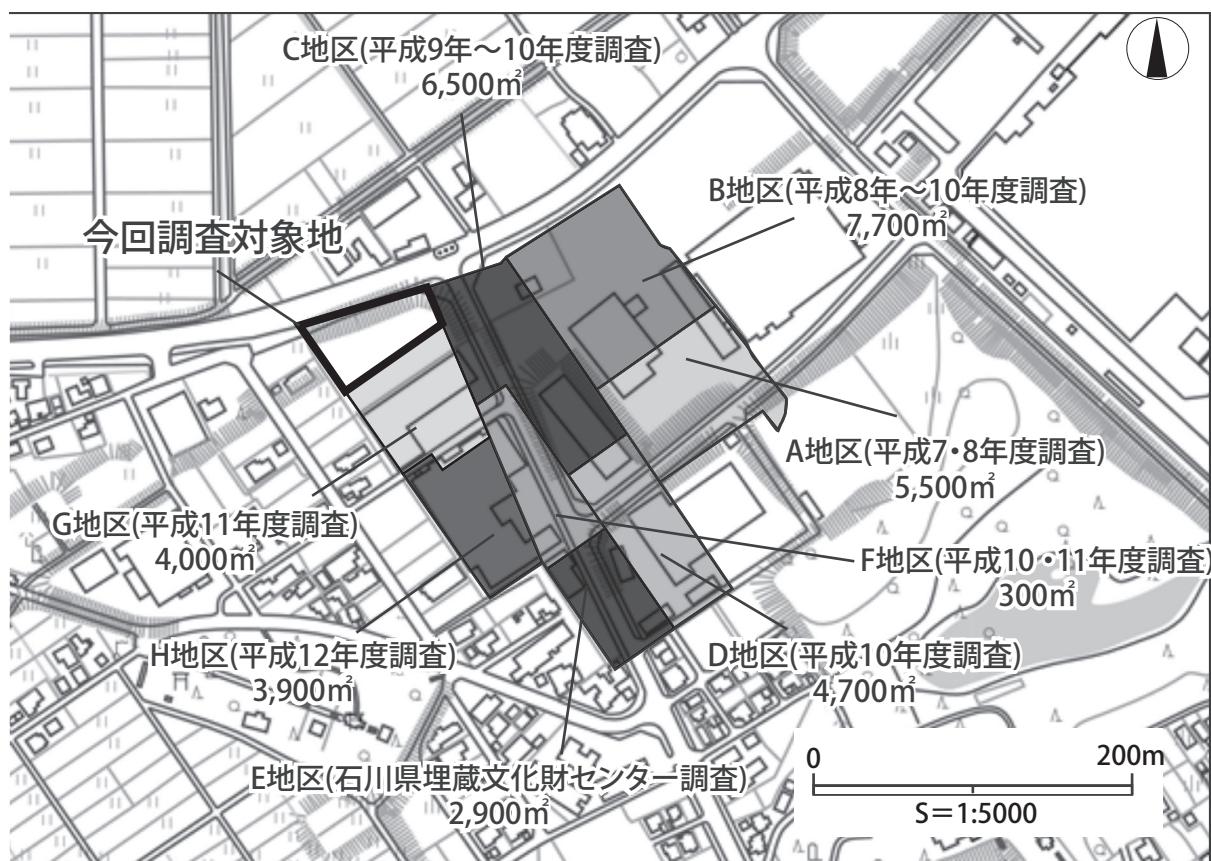
令和 5 年 7 月 3 日に原因者から発掘届の提出を受け、同月 21 日付けで県教委に進達。8 月 1 日付けで原因者と覚書を交わし、8 月 21 日より発掘調査に着手した。

第2節 調査の方針

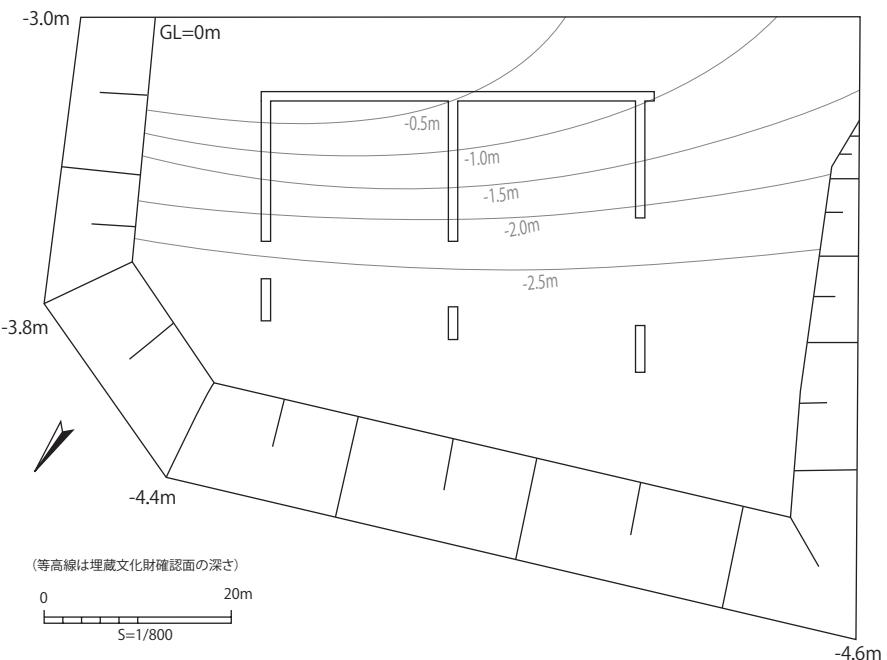
1 調査の方針・方法

発掘調査にあたっては、土置き場の確保の問題から、調査面積の約 1500m²を前半と後半で調査区を分けて調査を実施した。重機で表土を除去したのち、人力で遺構精査を開始した。調査区前半では、遺構精査の段階で、削平や攪乱を大きく受けていることが明らかになったものの、場所によっては、比較的良好に遺構の残存が認められた。精査完了後、遺構掘削、順次土層断面図や平面図の作成、写真撮影等の記録作業を行った。調査区前半の作業完了後、一部を埋め戻し、土置き場を確保した後、調査区後半も前半同様に作業を行った。なお、調査区後半では、南西側の地形の傾斜に合わせて遺構の存在が希薄になっていくことが確認されたため、表土除去は部分的に実施し、トレーニング掘削で遺構の存在の確認を行った。その結果、斜面下方へ向かう黒色地山面に遺構は確認できず、全面の掘削は行わずトレーニングでの確認に留めた。

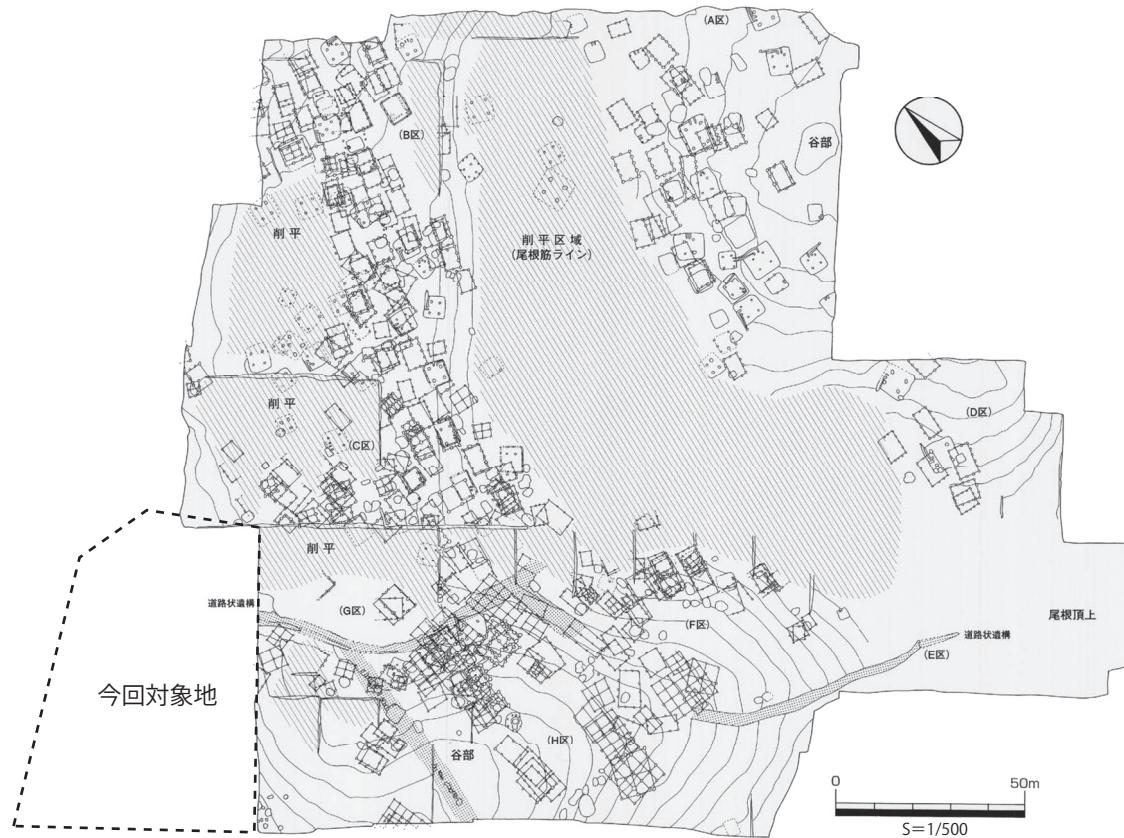
遺構の実測に当たっては、着手前に 4 級基準点を委託業務により設定し、この基準点と隣地の境界に平行して 5 m 間隔のグリッドを設定し、これを与点として行いながら手測り、フォトグラメトリ、光波測距儀を併用して行った。座標のグリッドは光波測距儀で得られた座標を基にプロットしている。原図の縮尺は、20 分の 1 である。



第1図 遺跡の調査履歴と本報告の調査対象地



第2図 試掘調査のトレンチ配置図



第3図 既存調査遺構配置図(望月ほか 2006に加筆)

2 出土品整理と報告書刊行 令和6年度に原因者と委託契約を締結。原因者負担のもと、会計年度任用職員を雇用し、出土品整理作業事業を実施して、報告書刊行に至った。

第3節 調査の経過

発掘調査は8月21日、22日に重機による表土除去を実施し、21日より、作業員を投入して調査区前半の遺構検出を開始した。

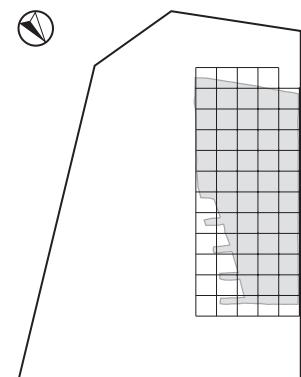
9月14日に検出状況の写真撮影を行い、19日より遺構掘削を開始し、掘削と並行して図化作業、写真撮影を実施した。

10月16日に調査区前半の全体平面図作成が完了した。

10月17日・18日かけて調査区後半の表土除去を実施し、19日より作業員を投入し、掘削を開始した。後半区は遺構の残存状況が芳しくないこと、また斜面下方の黒色地山面には傾斜に従って遺構の存在が極めて希薄であることから、調査区の一部はトレンチでの確認に留めた。

11月9日に掘削が完了し、全景の撮影を行った。

11月11日に月津公民館主催の現場見学会を実施し、計25名の見学者が来訪した。11月14日から21日にかけて平面図作成、22日・23日に撤収作業を行い、12月4日に埋め戻しを行い、全ての調査を完了した。



第4図 グリッド配置図

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

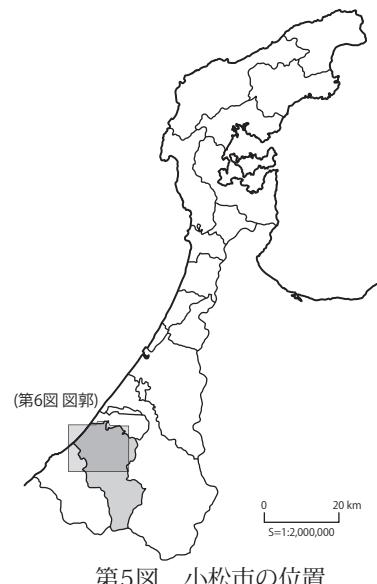
小松市は石川県南部に位置し、東西約 20km、南北約 30km に跨る市域は、面積 371.13km²を測る。南は大日山(1368m)で福井県勝山市と境を接し、ここより約 5km 北に位置する鈴ヶ岳(1174m)を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約 11 万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣 7 町村を合併して昭和 15 年市制施行、その後 2 次にわたる併入合併を経て現在に至っている。

市域は南東部の大半が山地(両白山地)が占めており、日本海に面する北西縁に海岸砂丘(沿岸洲)が発達し、その東側の低地部北半は、手取扇状地の南縁と接して、梯川とその支流の氾濫原で自然堤防が散在する沖積平野となっている(能美低地)。一方、南半は、三つの潟湖(木場潟・今江潟・柴山潟)すなわち加賀三湖とその埋積平野、それらに囲まれた台地(月津台地)からなる。

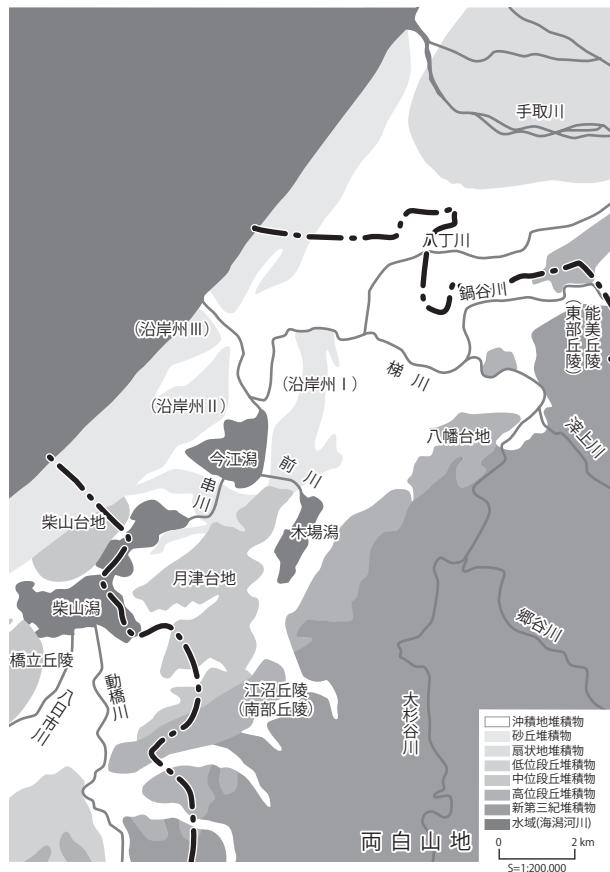
第2節 歷史的環境

月津台地は、縄文時代以降に人類の活動が明確になり、縄文時代中期以後、集落遺跡が営まれる。弥生時代にかけては遺跡の存在は低調になるが、弥生時代終末期から古墳時代中期にかけて遺跡数が増加する。やがて古墳時代後期には、台地上は古墳築造の舞台となり、7世紀かけて突如として出現する三湖台地古代集落遺跡群の登場をもって、再び集落域が展開する。

本遺跡は、この三湖台地古代集落遺跡群の範囲に含まれる。当遺跡群は小松市南部に広がる加賀三湖と称される木場潟、今江潟、柴山潟に囲まれた比高差 10 m ほどの月津台地（南北約 5 km、東西約 4 km）上の範囲に分布する。現時点では集落数は 21 を数え、発掘調査が行われた 8 割の遺跡が 7 世紀前葉から中葉にかけて出現するという特徴をもつ。特に集落群の登場時期にはオンドル状竈を持つ竪穴建物が多く確認されており、かつ江沼地域や能美地域の伝統的に営まれた集落遺跡域とは異なり、農業適地ではない台地上に営まれていることから、政治的



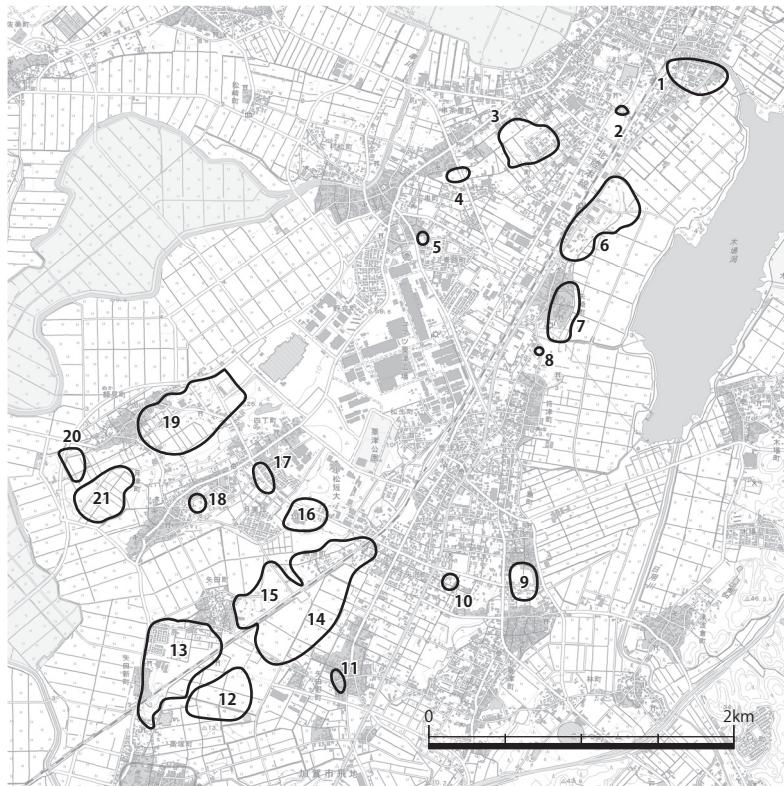
第5図 小松市の位置



第6図 小松市の地形

に移配された渡来系移民を中心とする集落群であったと推定されている。集落群は手工業を生業の中心とし、木場潟を挟んだ対岸に位置し、時を同じくして操業を開始する南加賀製鉄遺跡群や、同時期に生産拡大が図られる南加賀製陶遺跡群と一体的に営まれたと推定され、最終的には12世紀の製鉄遺跡群の操業停止に合わせるように集落は姿を消していく。

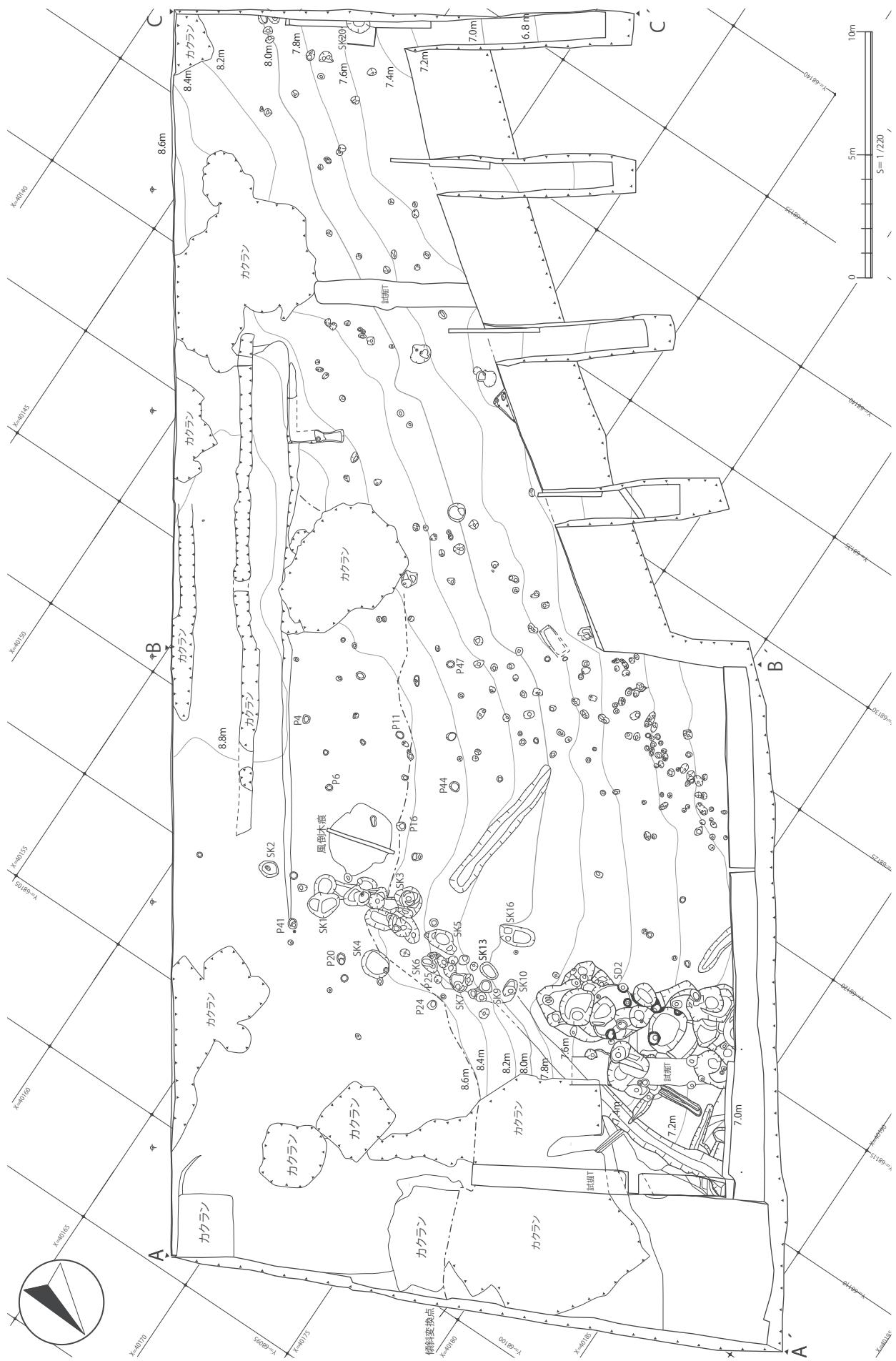
集落群は7世紀前半に成立し、7世紀後半から8世紀前葉の集落群の拡大、8世紀後半の集落群の再編に伴う変質を迎え、11世紀に新たな大型総柱建物を伴う中世的建物様式を導入、12世紀後半に衰退という変遷を辿る。



第7図 三湖台地古代集落遺跡群の位置図

番号	遺跡名	時代	種別	備考
1	五郎座貝塚	奈良・平安時代	散布地	
2	今江2丁目遺跡	7~9世紀	集落/小松市調査	鍛冶遺構あり
3	狐山遺跡	7世紀後半	集落/小松市調査	
4	串カソノヤマA遺跡	8世紀	散布地/小松市分調	
5	串カソノヤマC遺跡	7世紀	散布地/小松市分調	
6	薬師遺跡	7世紀中頃~9世紀	集落/小松市調査	「L」字形竪穴、6世紀前半竪穴と鍛冶痕跡
7	矢崎宮の下遺跡	7世紀中頃~8世紀	集落/小松市調査	6世紀前半竪穴と鍛冶痕跡
8	符津C遺跡	7世紀後半	集落/小松市調査	5世紀古墳重複
9	島遺跡	7世紀後半~9世紀前半	集落/小松市調査	5世紀散布、精鍊鍛冶遺跡
10	島B遺跡	奈良・平安時代	散布地	
11	矢田野神社遺跡	平安時代	散布地	
12	刀何理遺跡	8世紀	散布地/小松市分調	
13	矢田新遺跡	8~9世紀	集落/小松市調査	
14	矢田野遺跡	7~8世紀	集落/小松市調査	6世紀古墳群重複、「L」字形竪穴
15	矢田遺跡	6~7世紀	散布地	
16	念仏林南遺跡	7世紀前半	集落/小松市調査	飛鳥時代前半の短期集落、竪穴25、掘立25
17	月津新遺跡	8世紀	散布地	
18	月津A遺跡	8世紀	散布地	
19	額見町遺跡	7~12世紀	集落/小松市調査	「L」字形竪穴、竪穴150、掘立300
20	額見町西遺跡	7世紀前半主体	集落/小松市調査	「L」字形竪穴
21	茶臼山遺跡	7~8世紀	散布地	陶馬出土

第7図 三湖台地古代集落遺跡群一覧



第8図 級見町遺跡調査区全体平面図〈前半・後半合成〉(s = 1/220)

第Ⅲ章 調査成果

第1節 調査区の概要と遺構の分布

本調査区は、月津台地の縁辺部にあたり、調査区東側（既存建物側）の台地部では、表土下約0.1mで黄褐～明黄褐地山土が認められた。東西方向で調査区中ほどが傾斜変換点となり、西側へ進むにしたがい標高が下がっていく。この傾斜に併せて厚い造成及び耕作土層が存在し、地山を掘り込む形で畑の段切りや掘削痕などが残っていた。これらの層には、古代～中世の土器片に近代の陶磁器片などが含まれており、近代から現代にかけての耕作や造成の影響が大きいことが認められた。基本的には調査区西側及び南西側の一部を除き、地山直上までこれらの影響を受けており、ほとんど包含層は残存していなかった。遺構は前半調査区に集中して分布し、土坑とピットを確認した。また調査区西側から南側にかけては、その形状や堆積からほとんどが根痕と推定される。

第2節 道路状遺構及びその他の遺構

本調査区で確認された主要な土坑群は、過去調査のG地区で確認された道路状遺構（SD30）の延長上に存在し、路床下の波板状凹凸面と想定される。土坑埋土はよく締っており、台地部から斜面を下るように連続かつ密集して構築され、斜面では最も傾斜の緩い谷状部分に沿うように集中する。便宜上調査時の遺構番号に基づいて報告を行うが、本来一体のもので、SD30に接続する道路状遺構であると考えられる。この道路状遺構は、他と同様に削平の影響を大きく受けており、ほとんど残存していない部分も存在するが、斜面では比較的残存した状態で検出した。

〈土坑・溝〉

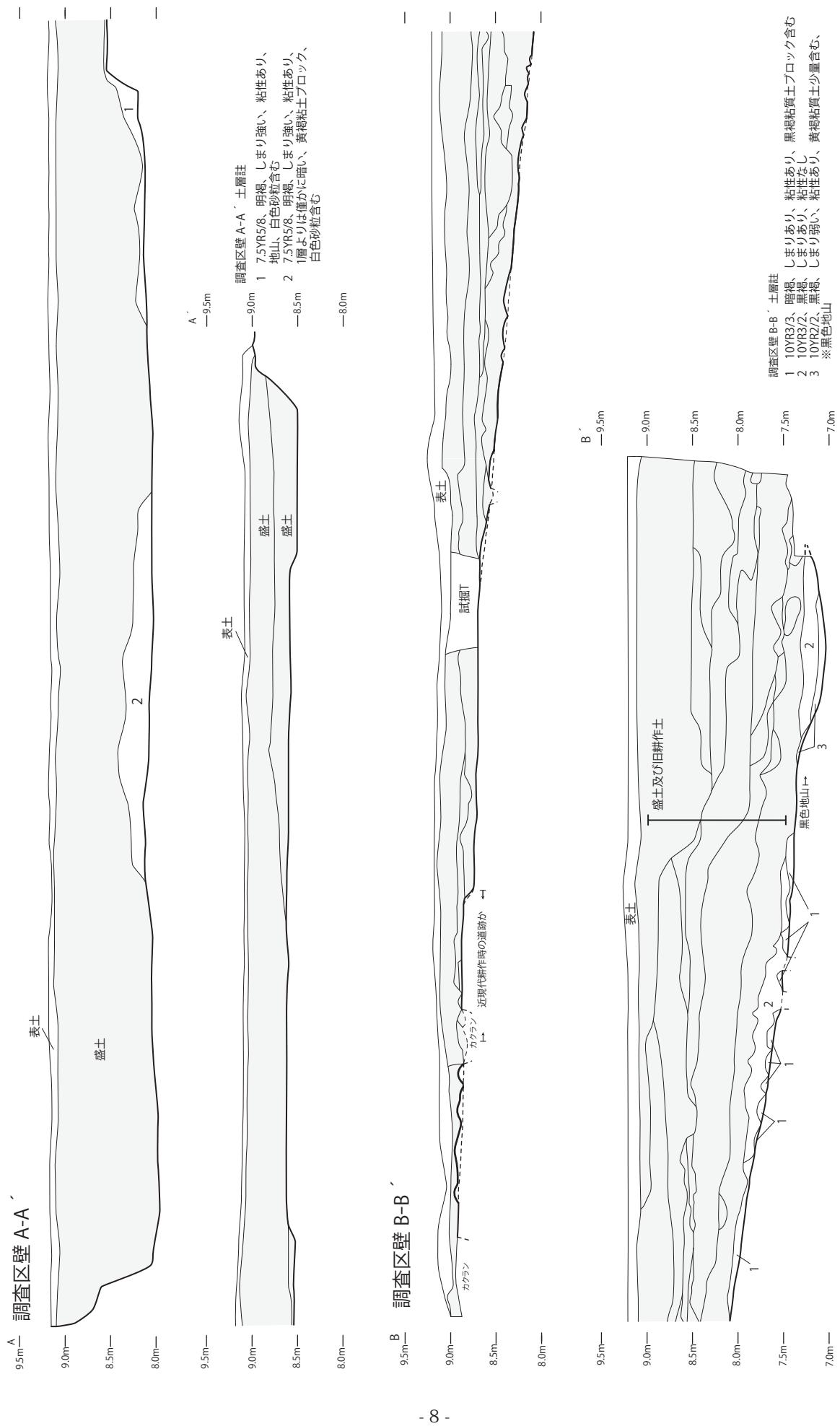
SK1 路状遺構の南東側、台地部で検出した。東西長軸約1.2m、南北長軸で約1.7m、を測り、深い土坑を切るように深い土坑が構築されている。検出面に細かい土器片が集中し、鍛冶滓と思しき小片も認められた。

SK3 道路状遺構の南東側、台地部から斜面への傾斜変換点付近で検出した。複数の土坑が連続して構築されており、各土坑に(1)～(8)の枝番を振っている。(1)～(5)は溝状に連続し、(1)～(3)、(5)までの纏まつた掘り込みの規模は、南北約1.6m、東西約1.2m、検出面からの深さで約0.4mである。やや離れた(4)は、長軸約1.2m、短軸約1.1m、最大深さは検出面から約0.6mで段状に掘り込まれる。(6)～(8)は、掘り込みが浅く、こちらも溝状に連続しており、全体で南北約2.2m、東西約0.8m、検出面からの最大深さ0.2mを測る。遺物は、(4)から比較的形の残っている須恵器片などが纏まつて出土しており、概ね⑩層付近に集中する。時期は三湖台地編年で4A～5B期である。なおSK3から出土した須恵器片はSK1やSK5とも接合を確認している。

SK4 道路状遺構の南東側、台地部で検出した。平面形は正円形に近く、長軸約1.2m、短軸約1.1m、検出面から深さ約0.15mを測る。断面は浅鉢状を呈する。

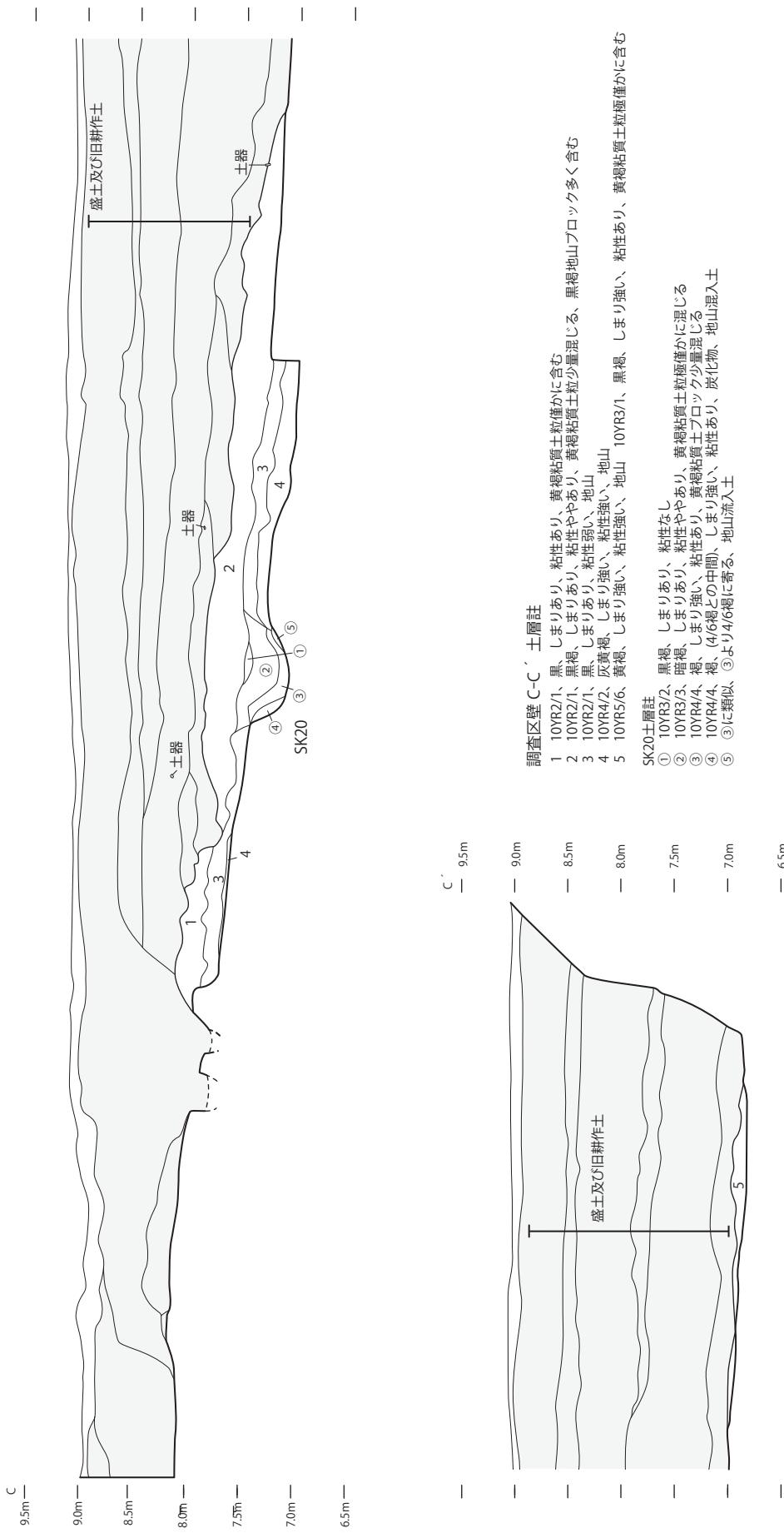
SK5 道路状遺構の中央部、斜面上で検出した。平面は橢円形で長軸約1.4m、短軸約0.8m、検出面からの深さ約0.2mを測る。

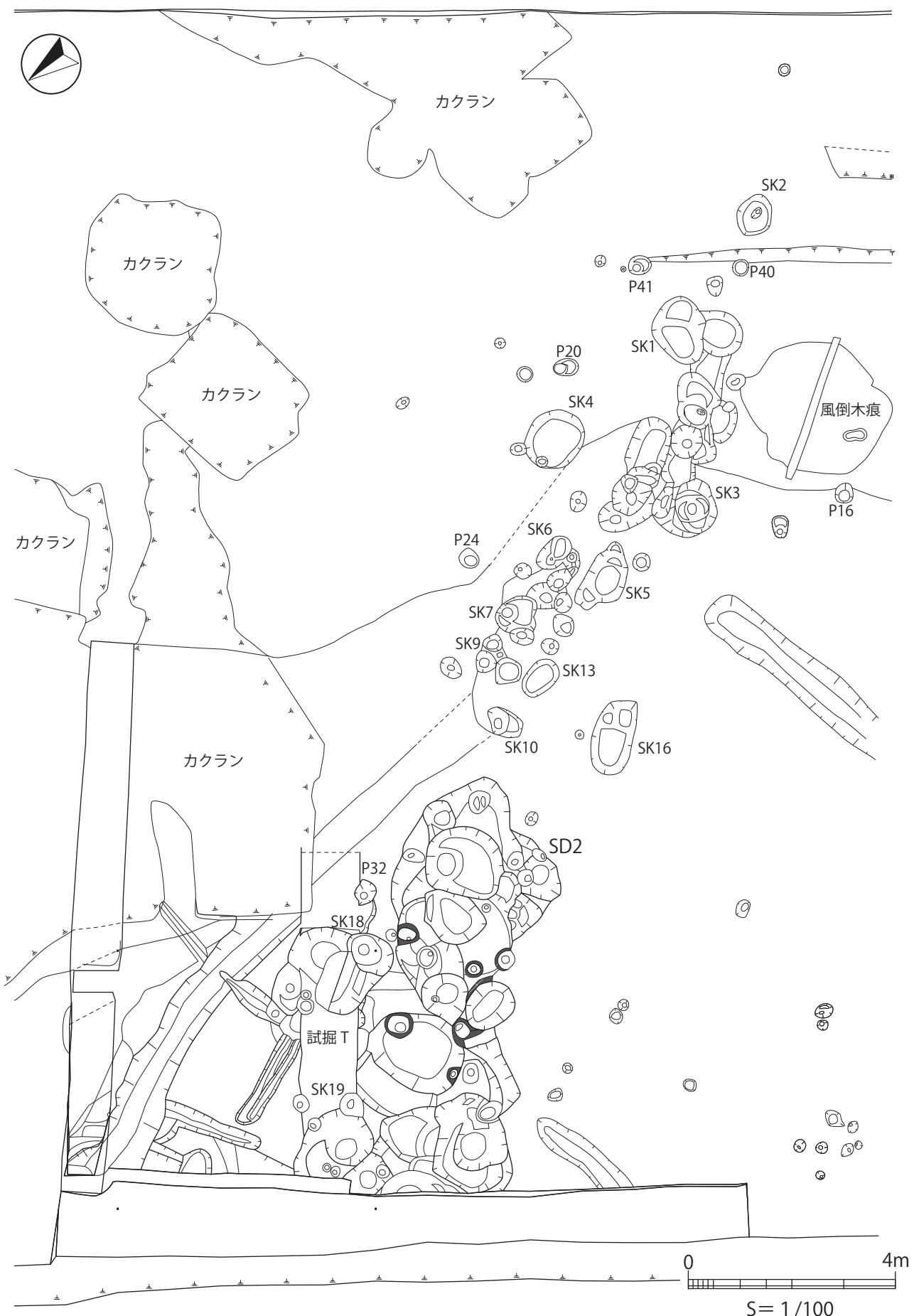
SK6・SK7 道路状遺構の中央部、斜面上で検出した。複数の土坑が溝状に連続する。SK6は、長軸約0.7m、短軸約0.4m、検出面からの深さ約0.15mを測る。SK7は、長軸約1.2m、短軸約0.7m、検出面からの深さ約0.5mを測る。



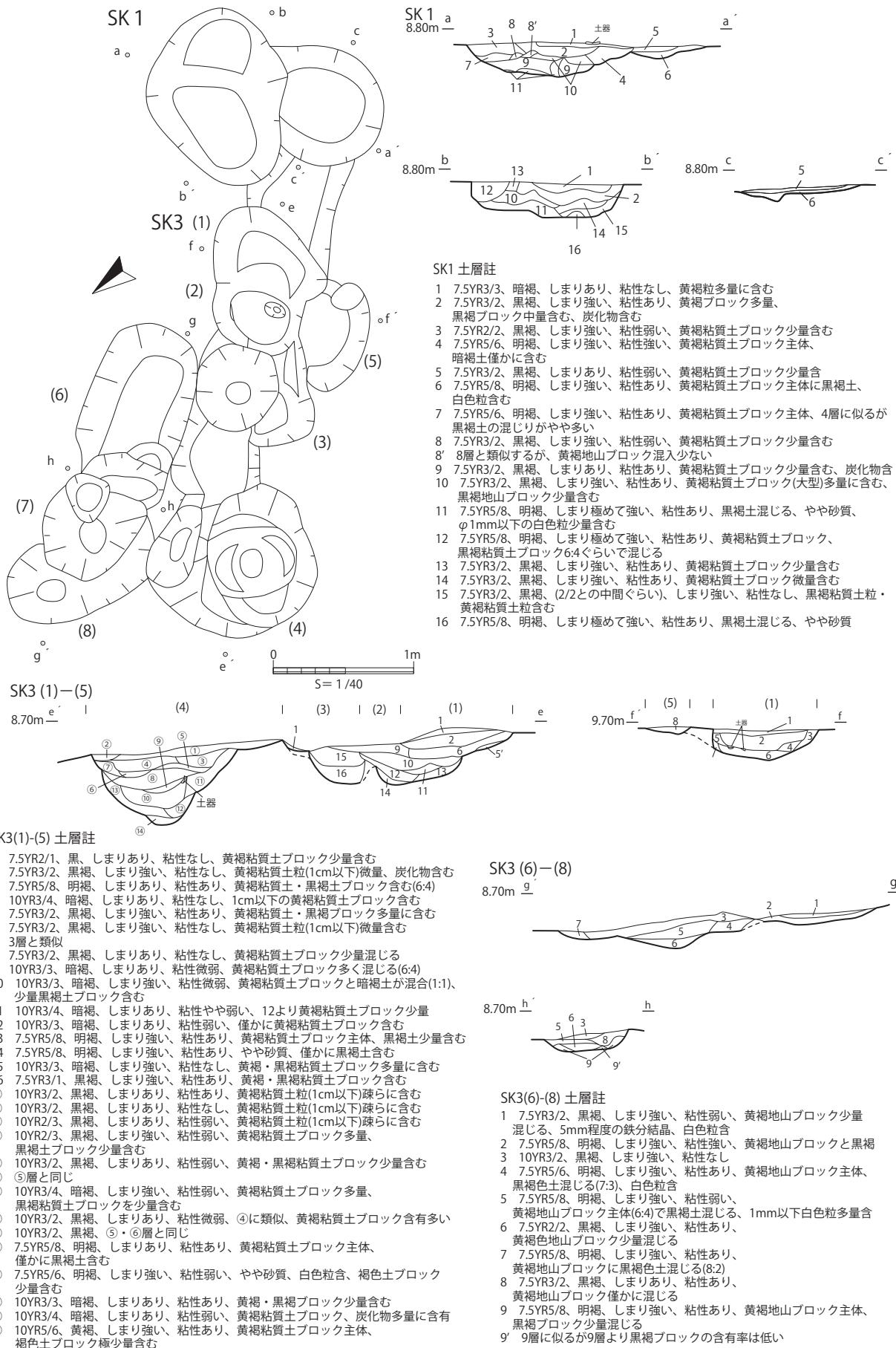
第9図 調査区壁土層断面図 (s = 1/60)

調査区壁 C-C'

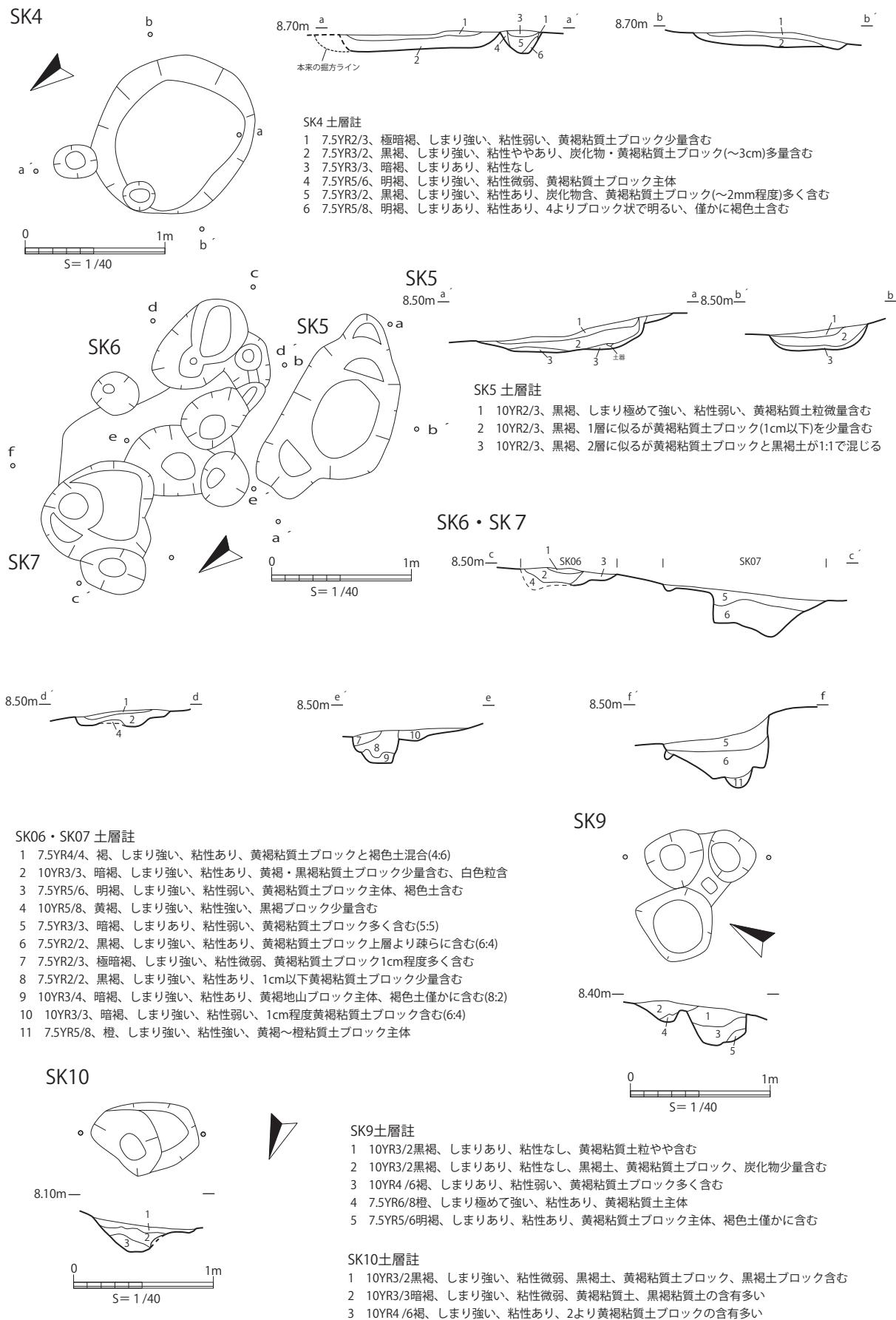




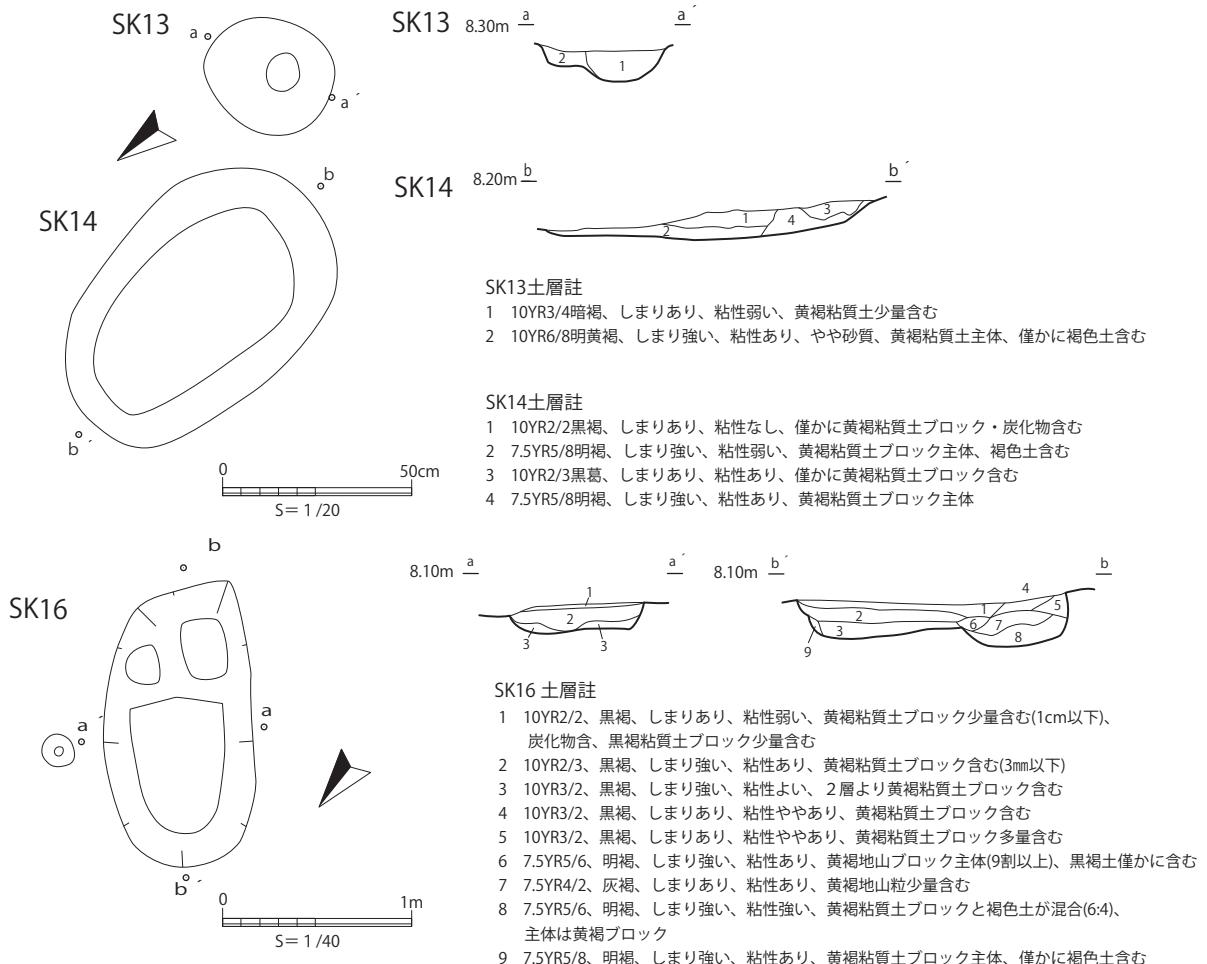
第 11 図 道路状遺構付近拡大平面図



第12図 土坑遺構図 (SK1・SK3)



第13図 土坑遺構図 (SK4・SK5・SK6・SK7・SK9・SK10)



第 14 図 土坑遺構図 (SK13・SK14・SK16)

SK9 道路状遺構の中央部、SK7 の下方斜面で検出した。3つの土坑が連続し、全てまとめた規模で南北約 0.7m、長軸約 1m、短軸 0.7m 検出面からの深さは約 0.3m を測る。

SK10 道路状遺構の中央部、SK9 の下方斜面で検出した。長軸約 0.8m、短軸約 0.5m 検出面からの深さ 0.2m を測る。

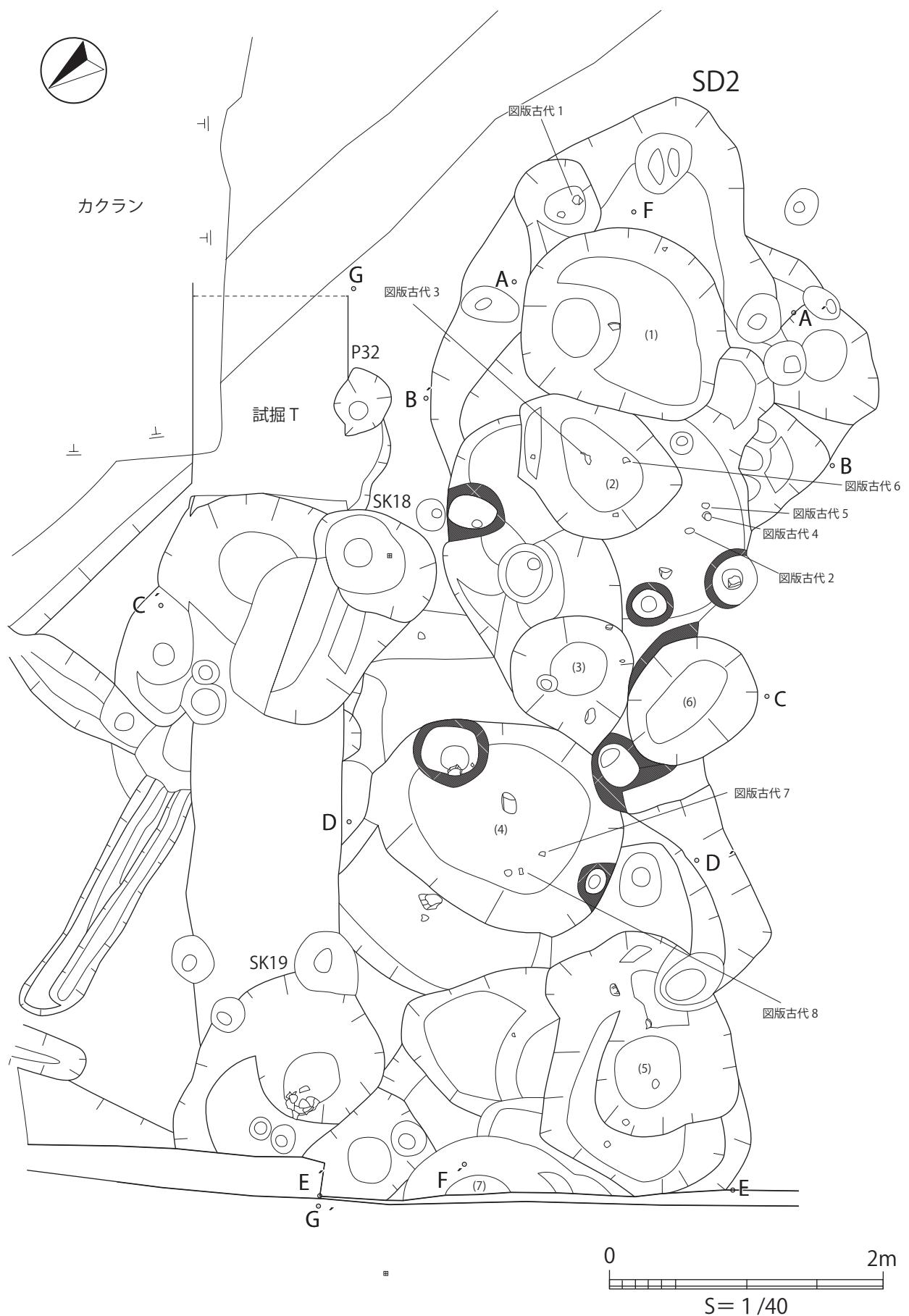
SK13 道路状遺構の中央部、SK7 の西側斜面で検出した。平面形は正円に近く、長軸約 0.35 m、短軸約 0.3m、検出面からの深さ約 0.1m を測る。

SK14 道路状遺構の中央部、SK13 の北側斜面で検出した。平面形は橢円形で長軸約 0.8m、短軸約 0.55m、検出面からの深さ約 0.1m を測る。断面は浅鉢形である。

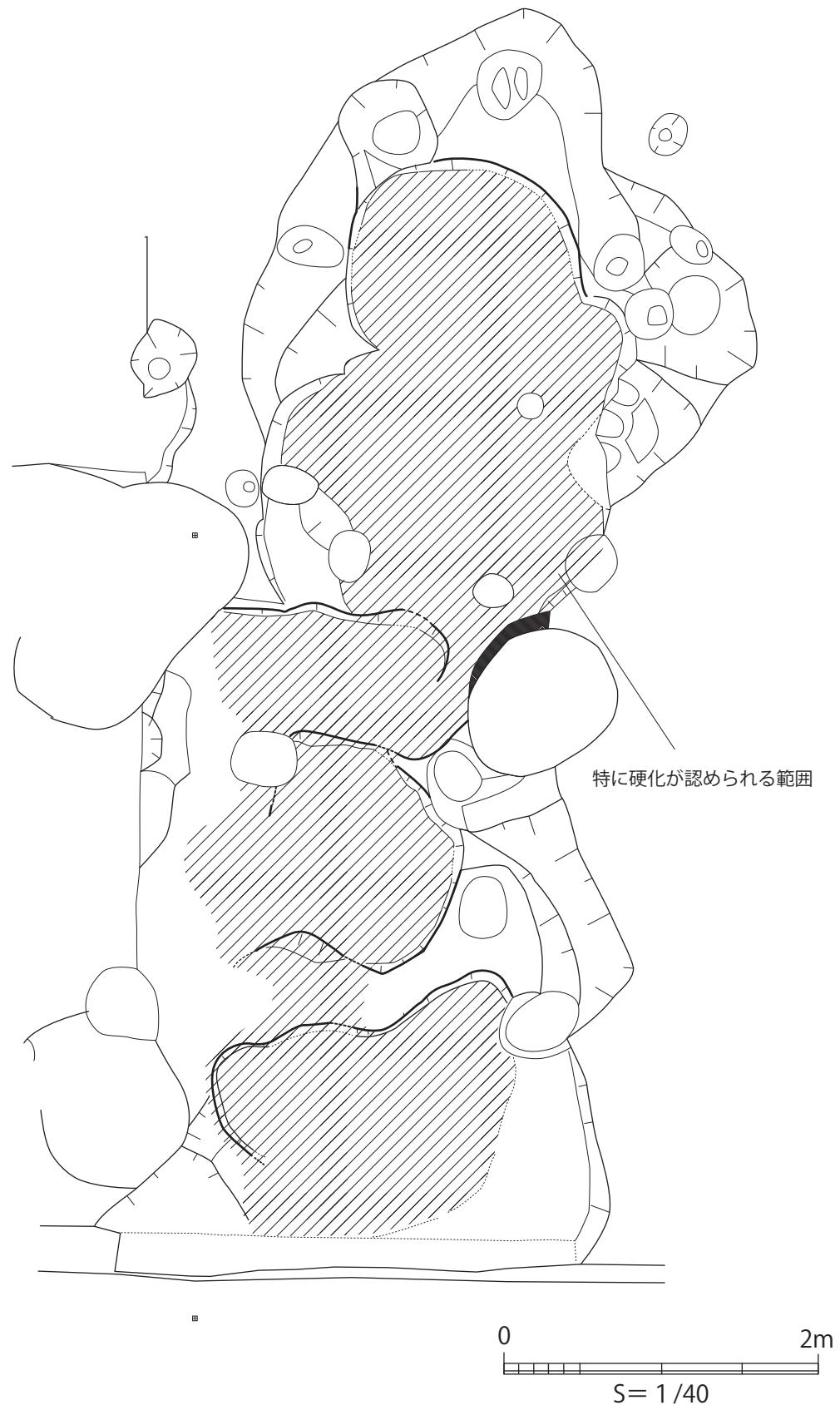
SK16 道路状遺構の中央部、SK14 の西側、土坑群からやや離れた斜面で検出した。平面形は橢円形で長軸約 1.5m、短軸約 0.4m、検出面からの深さ約 0.2m を測る。断面は平底からしっかりと立ち上がり、南東側が一段掘り込まれたように深くなっている。

SK18 道路状遺構 SD2 に隣接する東側斜面で検出した。土層断面については SD2 の G-G' の土層断面を参照いただきたい。複数の土坑が連続して構築されており、全てまとめた規模で、南北約 2.2 m、東西約 1.8 m、最も深い西側の土坑で検出面からの深さ約 0.55 m を測る。SD2 の土坑群の埋土と比較して軟質かつ黄褐粘質土ブロックの混入も少なく、堆積状況も異なる。遺物の出土は時期不詳の土器小片のみである。

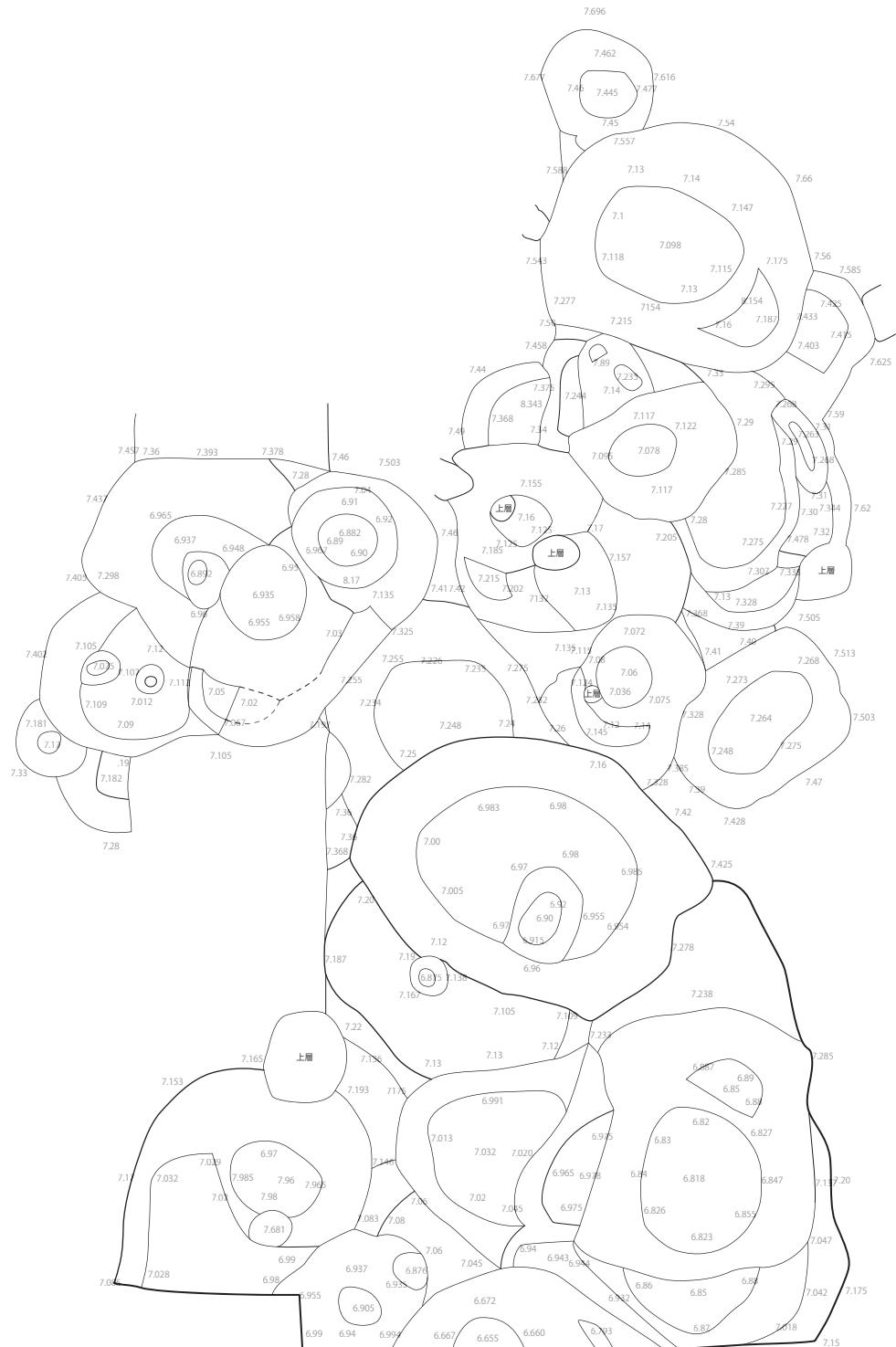
SD2 調査区北側、斜面に密集する土坑群の延長線上の位置で検出した。検出時には不整形の溝状遺



第15図 SD2 遺構平面図



第 16 図 SD2 土坑内段状面 (硬化面) 検出範囲

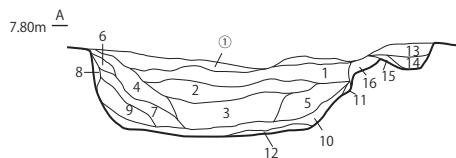


6.902 (数字/±標準偏差)

A horizontal number line representing a distance of $2m$. The line is marked with 10 equal segments, each representing $0.2m$. The origin is labeled 0 and the end point is labeled $2m$. Below the line, the label $S = 1/40$ is centered, indicating the length of each segment.

第17図 SD2完掘状況平面図

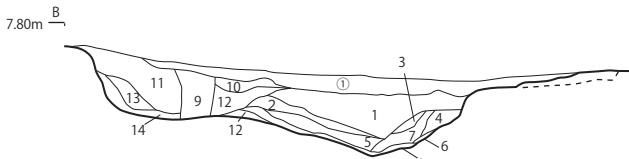
SD2 A-A'



SD2 A 土層註記

- ① 10YR3/2 黒褐 しまりあり、粘性なし、黄褐粘質土ブロック粒わざかに含む、炭化物含む
- 1 10YR3/2 黒褐 しまり強い、粘性弱い、黄褐粘質土ブロック粒含む
- 2 10YR2/3 黒褐 しまり強い、粘性弱い、黄褐粘質土粒1層より少量含む
- 3 10YR3/2 黒褐 しまりあり、粘性やや弱い、1層に似るが、しまりは1層より弱い、黄褐粘質土ブロック疊らに
- 4 10YR3/2 黒褐 しまり強い、粘性やや弱い、1層に類似
- 5 10YR3/2 黒褐 しまりあり、粘性あり、黄褐粘質土粒僅かに含む
- 6 10YR5/6 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土主体、黒褐土混じる
- 7 10YR3/2 黒褐 しまりあり、粘性ややあり、3層に似るが黄褐粘質土の含有は少ない
- 8 10YR5/8 黄褐 しまり堅緻、粘性強い、黄褐粘質土ブロック層
- 9 10YR5/8 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック主体
- 10 10YR3/2 黒褐 しまりややあり、粘性微弱、黄褐粘質土ブロック含む
- 11 10YR5/8 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック、黒褐土含む
- 12 10YR5/8 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック主体、黒褐土含む
- 13 10YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性やや弱い
- 14 10YR4/4 黒 しまりあり、粘性強い、黄褐粘質土ブロック含む
- 15 10YR5/8 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック・暗褐土僅かに含む
- 16 10YR5/8 黄褐 しまり強い、粘性強い、黄褐粘質土主体

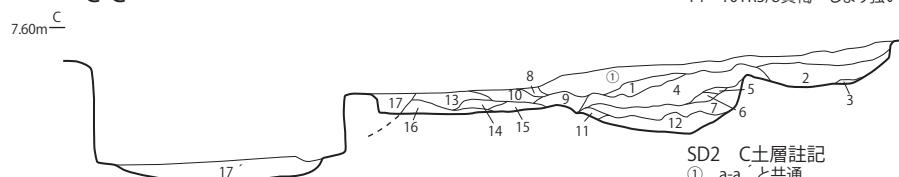
B-B'



SD2 B 土層註記

- ① a-a' と共に
- 1 10YR5/6 黄褐 しまり堅緻、粘性あり、黄褐粘質土ブロック主体、暗褐土少、黒褐粘質土ブロック僅かに含む
- 2 10YR3/2 黒褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック少量含む、炭化物
- 3 10YR3/2 黒褐 しまりあり、粘性強い、黄褐粘質土ブロック含む
- 4 10YR5/6 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック主体(2層に類似)
- 5 10YR3/2 黒褐 しまりあり、粘性あり、小黄褐粘質土ブロック含む
- 6 10YR5/6 黄褐 しまりあり、粘性強い、黄褐粘質土ブロック含む
- 7 7.5YR5/6 明褐 しまり強い、粘性あり、2層に似るがブロックは小さい
- 8 10YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性あり、黄褐粘質土ブロック僅かに含む
- 9 10YR2/3 黒褐 しまりあり、粘性弱い、黄褐粘質土ブロック僅かに含む
- 10 7.5YR5/8 明褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック僅かに含む
- 11 10YR2/3 黑褐 しまりあり、粘性弱い、黄褐粘質土ブロック少量含む
- 12 10YR5/6 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック主体
- 13 10YR4/2 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック、暗褐土 1:1で混じる
- 14 10YR5/8 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック主体、褐色土僅かに含む

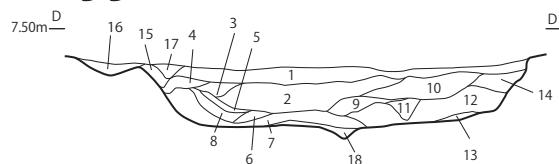
C-C'



SD2 C 土層註記

- ① a-a' と共に
- 1 10YR2/3 黒褐 しまりあり、粘性なし、黄褐粘質土・黒褐土ブロック含む
- 2 10YR3/3 暗褐 しまり強い、粘性弱い、黄褐粘質土ブロック含む
- 3 10YR2/3 黑褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土主体、褐色土僅かに含む
- 4 10YR2/3 黑褐 しまり堅緻、粘性弱い、黄褐粘質土・黒褐土ブロック 1:1で含む
- 5 10YR3/2 黒褐 しまり強い、粘性弱い、極僅かに黄褐粘質土粒含む
- 6 10YR5/6 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック
- 7 10YR2/3 黑褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土粒、黒褐土ブロック少量含む
- 8 10YR4/6 黑 しまりあり、粘性あり、黄褐粘質土ブロック多く含む
- 9 10YR3/3 暗褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土・褐色粘質土ブロック斑に含む
- 10 10YR3/3 暗褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック斑に含む
- 11 10YR3/2 黑褐 しまりあり、粘性あり、黄褐粘質土ブロック僅かに含む
- 12 10YR5/6 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック・黒褐土含む(7:3)
- 13 10YR4/4 黑 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック含む
- 14 10YR3/2 黑褐 しまりあり、粘性弱い、黄褐粘質土・褐色土ブロック極少量含む
- 15 10YR4/4 黑 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土・褐色土ブロック含む
- 16 10YR5/6 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土主体、暗褐土含む
- 17 10YR3/2 黑褐 しまりややあり、粘性なし、黄褐粘質土僅かに含む
- 18 10YR3/2 黑褐 しまりややあり、粘性なし、黄褐粘質土僅かに含む

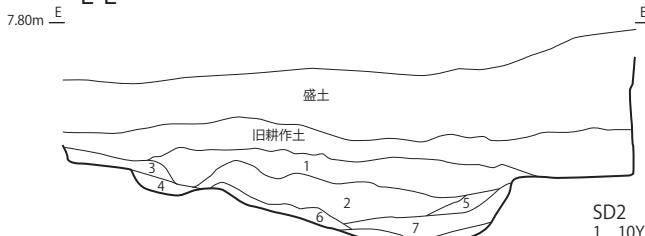
D-D'



SD2 D 土層註記

- 1 10YR3/2 黒褐 しまりあり、粘性微弱、黄褐色地山粒、ブロック極僅かに含む
- 2 10YR3/3 暗褐 しまり強い、粘性弱い、黄褐粘質土ブロック多量、黒褐粘質土・炭化物少量含む
- 3 10YR3/3 暗褐 しまり強い、粘性ややあり、黄褐粘質土ブロック含む
- 4 10YR3/2 黑褐 しまりあり、粘性弱い、黄褐粘質土ブロック極僅かに含む
- 5 10YR3/2 黑褐 しまりあり、粘性弱い、黄褐粘質土ブロック僅かに含む
- 6 10YR3/3 暗褐 しまり強い、粘性ややあり、黄褐粘質土ブロック多量含む
- 7 10YR3/2 黑褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック含む
- 8 6と類似、6に黄褐粘質土ブロックの含有が少ない
- 9 10YR3/2 黑褐 しまりあり、粘性ややあり
- 10 10YR3/3 暗褐 しまり強い、粘性弱い、黄褐粘質土粒少量・暗褐土ブロック多量
- 11 10と類似、10より黄褐粘質土ブロックの含有多い
- 12 10YR4/6 黑 しまり強い、粘性あり、黄褐・黒褐粘質土ブロック含む
- 13 10YR3/2 黑褐 しまりあり、粘性あり、黄褐粘質土粒、黒褐粘質土ブロック僅かに含む
- 14 10YR3/2 黑褐 しまりあり粘性あり、黄褐粘質土ブロック少量組む
- 15 10YR5/8 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土主体
- 16 10YR3/3 暗褐 しまりあり、粘性あり、黄褐・暗褐粘質土ブロック含む
- 17 10YR5/8 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック主体
- 18 7.5YR5/6 明褐 しまり堅緻、粘性あり、黄褐粘質土主体、黒褐土僅かに含む

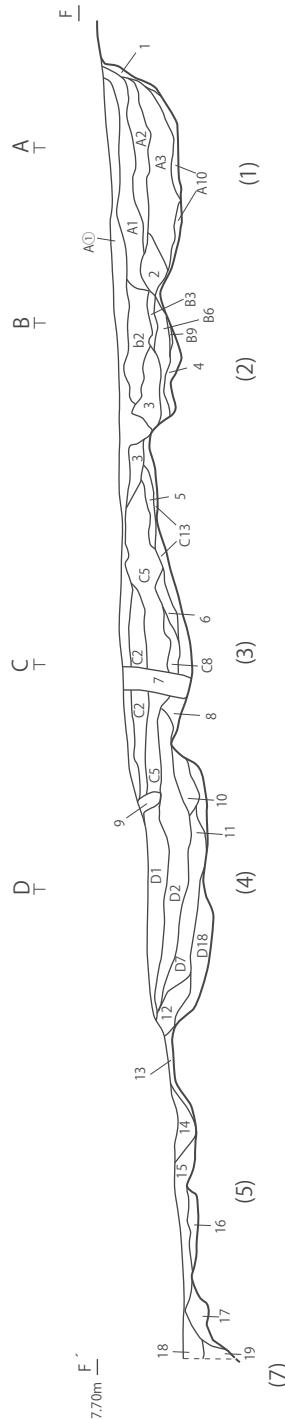
E-E'



SD2 E 土層註記

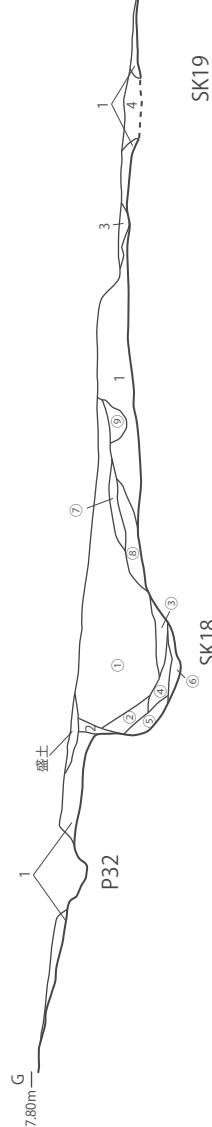
- 1 10YR3/2 黒褐 しまりあり、粘性なし、黄褐粘質土・黒褐土ブロック少量含む
- 2 10YR3/2 黑褐 しまりあり、粘性微弱、黄褐粘質土・黒褐粘質土ブロック多量に含む
- 3 10YR5/8 黄褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土ブロック主体、暗褐土含む
- 4 3に類似、暗褐土は3より少量
- 5 10YR3/2 黑褐 しまりあり、粘性なし、黄褐粘質土ブロック多量に含む
- 6 10YR3/2 黑褐 しまりあり、粘性なし、黄褐粘質土ブロック多量に含む
- 7 10YR2/3 黑褐 しまりあり、粘性あり、黄褐粘質土ブロック含む、黒褐粘質土ブロック極少量
- 8 10YR3/2 黑褐 しまり強い、粘性あり、黄褐粘質土・灰白色粘質土ブロック多量に含む

第 18 図 SD2 土層断面図 (A - E, S = 1/40)



SD2 F 土層註記

※A～Dは各土層註を参照
1 10YR5/8 黑褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘土質土主体
2 10YR3/2 黑褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘土質土ブロックと暗褐色粘土質土ブロック含む
3 10YR4/3 にぶい黄褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘土質土ブロック主体、僅かに暗褐色土含む
4 10YR4/3 にぶい黄褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘土質土ブロック主体、僅かに暗褐色土含む
5 10YR3/2 黑褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘土質土ブロック多量に含む
6 10YR4/6 黑褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘土質土ブロック、褐色土ブロック含む
7 10YR2/2 黑褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘土質土粒極わずかに含む
8 10YR3/3 暗褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘土質土ブロック、暗褐色土含む
9 10YR3/3 暗褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘土質土ブロック、暗褐色土含む
10 10YR4/6 黑褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘土質土主体
11 10YR3/2 黑褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘土質土ブロック少量含む
12 10YR3/2 黑褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘土質土主体、黒褐色土含む
13 10YR5/8 黑褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘土質土ブロック多量に含む
14 10YR3/2 黑褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘土質土ブロック多量に含む
15 10YR3/2 黑褐色、しまり強い、粘性弱い、黒褐色土ブロック状に含む
16 10YR3/2 黑褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色・黒褐色ブロック混合
17 10YR3/3 暗褐色、しまり強い、粘性ややあり、黄褐色粘土質土ブロック僅かに混じる
18 10YR3/3 暗褐色、しまり強い、粘性あり、黄褐色ブロック僅かに混じる
19 10YR6/8 明黄褐色、しまり堅密



構として認識しており、ベルトを設定し、掘り下げを行った結果、下位は複数の土坑を密に連続して構築したものと確認した。これは過去調査のSD30C区西側の北西末端で検出されている連続土坑とも類似するが、形態や堆積等に差異がある。

斜面上方にあたる遺構南東側から下方の北西端までは約7.85m、標高差は1.14mを測り、幅は場所によりバラツキがあるもの約2m～4mである。下端の土坑は調査区壁にかかっており、更に下方へと続いているものと考えられる。

SD2内の各土坑には枝番を振っている。主な土坑を見ていくと(1)は長軸約1.6m、短軸1.4m、検出面からの深さ0.45mを測る。(2)は、長軸約1m、短軸約0.9m、検出面からの深さ約0.4mを測る。(3)は、長軸約1m、短軸約0.9m、検出面からの深さ約0.35mを測る。(4)は長軸約2.2m、短軸約1.45m、検出面からの深さは、約0.45mを測る。(5)は、長軸約2.5m、短軸約1.8m、検出面からの深さ約0.35mを測る。(6)は、長軸約1.1m、短軸約0.8m、検出面からの深さ約0.25mを測る。

いずれの土坑も緩い丸底からきつめの傾斜で立ち上がり、平面形は正円に近い橢円からやや不整形な橢円状を呈する。土層は、検出面下にブロックの混入が少なく、よく締った黒褐土層(A①層)が存在し、その下に硬く締った黒褐土ないしは、黄褐粘土ブロックとの混合層が認められた。この層の上面は斜面の傾斜には沿っておらず、水平に近く、下方側の土坑との境目で段状となっていた。なお、この硬さは溝底の黄褐粘質土ブロックよりは柔らかいが、移植ゴテでやや掘削に苦労する程度の硬さであった。また、いずれも土坑底付近に厚さ数cmの黒褐土層が認められた。はっきりとした性格は不明であるが掘削から埋没まで時間が空いた、または何らかの有機物を埋設した可能性も考えられる。

SD2からは須恵器・土師器片等が出土しており、主に各土坑の上層から中層から出土した。既往調査の道路状遺構で検出されたような敷き詰めや、路面修理に伴い混入させたのような痕跡は確認できず、分布も疎らである。遺物の時期については三湖台編年3B～3C期、4B～5C期である。

〈ピット〉

P16 調査区の中央、台地部から斜面への傾斜変換点上で検出した。長軸0.4m、短軸0.35m、検出面からの深さ0.35mを測る。平面は円形に近い。ピット内からは、8C期の土師器皿が出土しており、中世に属するピットと考えられる。

P20 調査区東側、台地部の道路状遺構近くで検出した。長軸約0.5m、短軸0.3m、検出面からの深さは約0.25mを測る。平面は橢円で、北側が一段掘り込まれたような形状を呈する。上層には多量に炭化物に認められる。

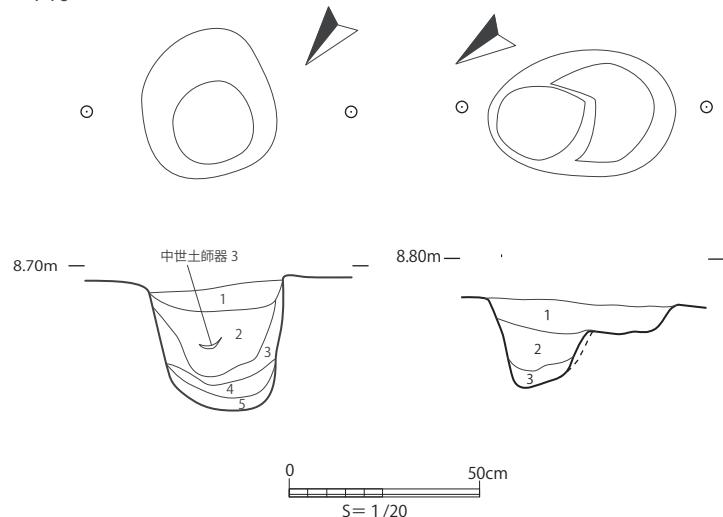
P25 調査区中央、道路状遺構のSK6の北側下方の斜面で検出した。長軸・短軸約0.3m、検出面からの深さは、約0.2mを測る。平面は円形を呈しており、位置関係から道路状遺構と関連する可能性がある。

P40 調査区東側、台地部の道路状遺構のライン上で検出した。P40付近は旧耕作時の畑の段切りのラインがあり、削平の影響を大きく受けていると考えられる。長軸約0.35m、短軸約0.3m、検出面からの深さ約0.25mを測る。道路状遺構に関連する可能性がある。

P41 調査区東側、台地部で、P40の東側で検出した。長軸約0.4m、短軸約0.35m、検出面からの深さ約0.25mを測る。平面は2段掘り込み状を呈している。P40と同様に道路状遺構に関連する可能性がある。

P47 調査区中央、斜面上で検出した。長軸約0.35m、短軸約0.3m、検出面からの深さ約0.25mを測る。平面形は正円に近い橢円を呈する。

P16



P20

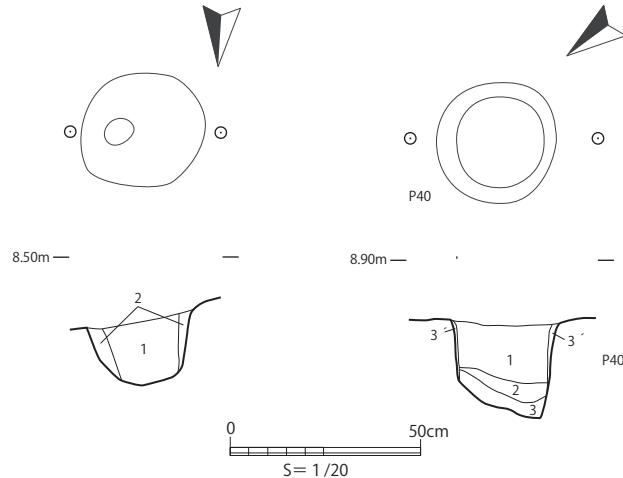
P16 土層註

- 1 10YR 2/3 黒褐、しまりあり、粘性微弱
黄褐色粘質土ブロック少量含む
- 2 10YR3/2 黒褐、しまりあり、粘性微弱
黄褐色粘質土ブロック疎らに含む
- 3 10YR3/2 黒褐、しまりあり、粘性あり
黄褐色粘質土ブロック含む
- 4 10YR4/4 褐、しまりあり、粘性あり
黄褐色粘質土ブロック・褐色土含む
- 5 10YR3/2 黒褐、しまりあり、粘性弱い
わずかに黄褐色粘質土ブロック含む

P20 土層註

- 1 7.5YR3/2 黒褐、しまりあり、粘性なし
黄褐色粘質土ブロック少量、炭化物多量に含む
- 2 7.5YR3/2 黒褐、しまり強い、粘性弱い
、黒褐色土と黄褐色粘質土ブロック混合
- 3 7.5YR5/8 明褐、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘質土主体

P25



P40

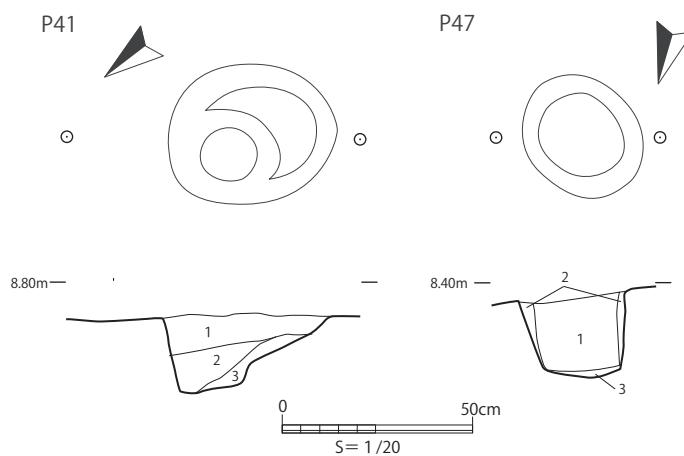
P25 土層註

- 1 10YR3/2 黒褐、しまりあり、粘性弱い、
黄褐色粘質土ブロック少量含む、
炭化物含む
- 2 7.5YR5/6 黄褐、しまり強い、粘性弱い、
黄褐色粘質土主体、黒褐色土含む

P40 土層註

- 1 7.5YR3/2 黒褐、しまりあり、粘性あり、
黄褐色粘質土ブロック少量、炭化物含む
- 2 7.5YR3/2 黒褐、しまり強い、粘性やや強い、
黄褐色粘質土ブロック多量に含む
- 3 7.5YR5/8 明褐、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘質土主体
- 3 3類似

P41



P47

P41 土層註

- 1 7.5YR3/2 黒褐、しまりあり、粘性弱い、
黄褐色粘質土ブロック少量、炭化物含む
- 2 7.5YR3/2 黒褐、しまりあり、粘性弱い、
黄褐色粘質土ブロック多量に含む
- 3 7.5YR5/8 明褐、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘質土主体

P47 土層註

- 1 10YR3/1 黒褐、しまりあり、粘性あり、
僅かに黄褐色粘質土ブロック含む、炭化物含む
- 2 10YR5/6 黄褐、しまりあり、粘性あり、
黄褐色粘質土ブロック主体、褐色土含む
- 3 10YR5/8 黄褐、しまり強い、粘性あり、黄褐色粘質土主体

第 20 図 ピット遺構図

第3節 出土遺物

【概要】 今回の発掘調査では、過去の削平により遺跡上部が失われていたこともあり、出土遺物は極めて少なく、7世紀から10世紀を古代土器。11世紀以降を中世土器として、分けて提示する

古代土器は須恵器を主とする。大半は、額見町遺跡G区で検出のSD30（道路状遺構1）から続く道路状遺構に関連するもので、遺構としてはSD2並びSK1、SK3、SK7、SK9、SK19に分けて図示するが、一連のものである。1の須恵器環B身が、三湖台編年での3B～3C期の8世紀初頭頃に位置づけられる以外は、三湖台4A～5C期の8世紀後半から9世紀前半に位置づけられるものである。当道路状遺構については8世紀末から9世紀前半に機能していたと考えていて、9世紀後半には埋没したと予想する（小松市教育委員会2009『額見町遺跡IV』85頁）。つまり、8世紀後半以前の土器は路面整備時に伴うもの、以降の土器は道路機能時に伴うものと位置付ける。包含層出土土器も、類似する時期が主だが、15の須恵器環Hは三湖台1B期のもので、額見町遺跡で集落が営まれ始めた頃のもので、主体はA・B・C・D区にある。

中世土器は、土師器のみである。8B～8C期の11世紀後半から12世紀前半のもので、額見町遺跡G地区・H地区に分布する中世掘立柱建物跡群や関連遺構に伴うものと評価できる。

【獣足器種】 古代土器で特筆されるものに、8の土師器獣足器種がある。脚基部の反り具合から三足の付く獣足壺の可能性が高いが、丸底で低い足が付く獣足鉢の可能性もある。額見町遺跡では、古代の仏堂に関連する遺物として、須恵器の獣足鉢や獣足羽釜が出土していて、いずれも8世紀後半頃と位置付けている。額見町遺跡等の三湖台地古代集落遺跡群と関連する南加賀窯跡群では、土師器焼成坑を本格導入する8世紀後半の時期を中心に、須恵器獣足器種に加えて、土師器でも獣足鉢を盛んに生産している。8世紀後半から9世紀前半は仏器生産が盛んな時期であり、特に、獣足器種を土師器で生産するのは、南加賀窯跡群の特徴と言えるものだろう。

出土遺物観察表

時代	遺構	図番	種別・器種	出土地点	法量	胎土	色・焼	残存	時期	調整等	備考	実番
古代	SD2	1	須恵・環B身中	SD2P2	台8.6、台高0.6	南加窯通常	N6/0・堅緻	1/15	3B～3C	底へラ切り、体下位削り	内底摩耗痕	6
		2	須恵・環B蓋大	SD2P8	鉢2.8、鉢高1.3	南加窯通常	2.5Y6/2・良	鉢片	5B	—	—	1
		3	須恵・環B身大	SD2-3+7#1層	台9.6、台高0.8	南加窯通常	5Y6/1・堅緻	底片	5B～5C	—	—	5
		4	須恵・環B身小	SD2P9	台8.1、台高0.65	南加窯通常	10Y6R/1・良好	底片	5B～5C	底へラ切りナデ	—	3
		5	須恵・環B身小	SD2P8	台7.3、台高0.4、	南加窯通常	N6/0・良好	底片	5B～5C	底へラ切り	—	2
		6	須恵・盤A	SD2P6	口15.8、高推3.1	南加窯通常	5Y6/1・堅緻	1/15	5B～5C	—	—	5
		7	須恵・瓶A	SD2P17	台10.7、台高1.4、	南加窯通常	N6/0・堅緻	1/20	4B～5B	胴下半削り	内底降灰	10
		8	土師・獣足器種	SD2-4+P1	幅5.7×長6.5×高6.6	南加賀窯?	7.5Y6R/6・不良	脚片	4B～5B	面取り、3本爪表現	壺又は鉢?	11
SK1	SK1	9	須恵・環B身大	SK1上層2+SK3-7上層	口14.6、高6.7、台9.0、台高0.3	南加窯通常	2.5Y6/1・堅緻	1/5	5C	底右回へラ切り	内底中央摩耗	12
		10	須恵・盤A	SK3-4+P19・25・26・31	—	南加窯通常	7.5Y6/1・良好	1/3	4A～4B	底削り	—	13
		11	須恵・小瓶	SK3-4+P3・5・8・12・13・21・30・32・+SK5-4P7	頸4.3、胴11.2、胴高8.3、台6.8、台高0.6	南加窯砂多	10Y5/1・良好	9/10	4C～5B	底右回へラ切り、胴部下位削り、内面絞り痕	粘土シマ痕	17
SK7	SK7	12	須恵・環B身中	SK7-1中層	台9.5、台高0.5、	南加窯通常	10Y6/1・良好	1/10	4B～4C	底へラ切り後爪形痕痕	—	14
		13	須恵・盤A	SK9-1埋土	口17.2、高推2.5	南加窯通常	5Y7/1・良	1/10	4B～4C	底へラ切り	外面スス痕	15
		14	須恵・盤A	SK19-2	口15.5、高推2.25	南加窯良質	10Y7/1・良	1/8	5C	底へラ切り	—	16
包含層	包含層	15	須恵・環H蓋	コク1T#土	口13.9	能美窯通常	5P8A/1・良好	1/15	1B	—	—	19
		16	須恵・環A	コク1T#土	口14.1、高2.95	南加窯通常	2.5Y6/1・良好	1/2	4A	底右回へラ切りナデ	—	20
		17	須恵・環A	コク1T#土	口14.8	南加窯通常	7.5Y6/1・良	1/10	4A	—	—	21
		18	須恵・高盤	シクフ	基6.4	南加窯通常	N5/0・良好	1/10	4A	底削り	倒立窯詰焼成	22
		19	須恵・碗B	コク2T#土	台7.8、台高0.8、	南加窯通常	7.5Y6/1・良	1/10	6C	底ナデ	—	23
中世	包含層	1	土師・平底楕	コク1T#土	底4.8	南加系砂多	10YR8/3・不良	1/5	8B	—	—	24
		2	土師・柱高台楕	コク2T#土	台5.4、台高0.6	北加賀系細砂	10YR6/3・不良	1/5	8B	—	—	25
		3	土師・平底小皿	P16・2層	口8.5、高1.8、底4.6	南加系砂多	10YR8/4・良	3/4	8C	底右回糸切り	—	18
		4	内黒・輪高台楕	コク1T#土	台6.2、台高0.15	南加系砂多	10YR8/3・良	1/5	8B	—	—	26
		5	内黒・柱高台小皿	コク2T#土	台4.4、台高1.0	北加賀系細砂	10YR7/3・良	1/4	8B	底右回糸切り	糸切段差	28
		6	内黒・柱高台小皿	コク1T#土	台4.2、台高1.4	南加系砂多	7.5YR7/4・良	1/5	8B	底右回糸切り	内底振れ空洞	27

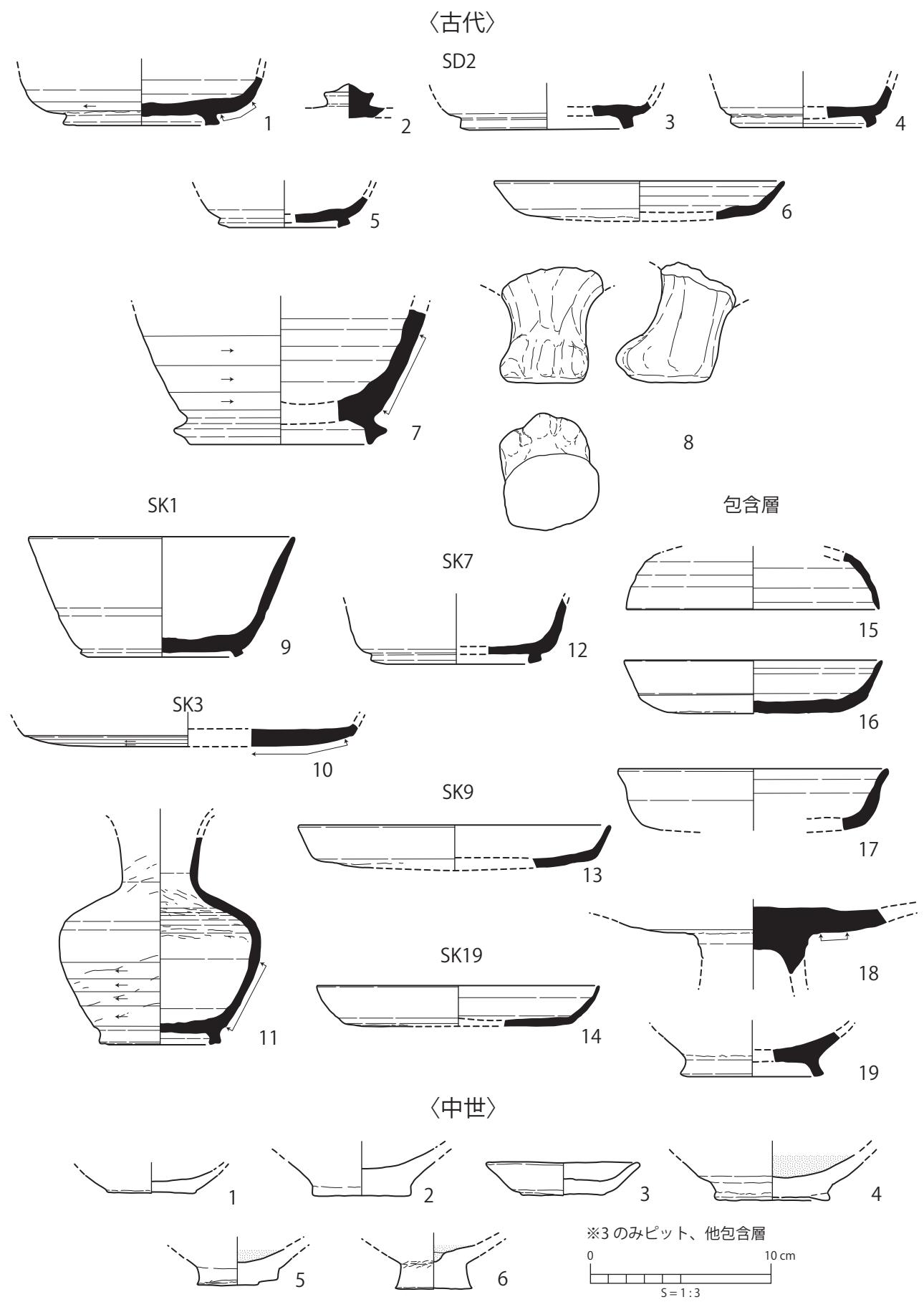
器種名：額見町遺跡の報告書で示した分類基準に基づく（小松市教育委員会2010『額見町遺跡V』156～157頁）。

法量=口：口径、鉢：つまみ径、底：底径、台：台径、基：脚基部径、頸：頸部径、胴：胴径、高：器高、鉢高：つまみ高、胴高：胴部高、台高：高台高。単位は全てcmとした。

胎土=須恵器胎土は須恵器窯場地で表記し、その中で特筆すべき部分は記した。土師器胎土は古代は窯場でその表記。中世は粘土質により南加賀系と北加賀系に分けて表記。

色・焼：土器の色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』1994年版に基づく。焼成は土器の焼締まりの強い順から、堅緻—良好—良—不良で表示。

時期：額見町遺跡の報告書で提示した三湖台編年案（小松市教育委員会2010『額見町遺跡V』157頁の対比表）に基づく。



第21図 出土遺物実測図

第4節 まとめ

本調査では、削平の影響を多く認めながらも、台地縁辺部の額見町遺跡の状況を確認することができた。特に過去調査区のSD30から続く道路状遺構の存在から、集落内から集落外へと伸びる道の様子が明らかになり、額見町遺跡の集落様相解明に繋がる新しい成果が得られたと言える。

〈道路状遺構の性格について〉

今回検出された道路状遺構は、比較的急な斜面に構築された土坑群(SK1～SK10付近)と、それに比べ緩やかな斜面に位置するSD2の二か所で波板状凹凸面が確認された。波板状凹凸面に関しては、一般的に斜面地で多く認められ、傾斜が急な部分で深く、平坦地に向かうにつれて深度を浅くし、消滅することが多く認められるとされる(近江2003)。額見町遺跡でも基本的に斜面地で確認されている他、市内では二ッ梨グミノキバラ遺跡や八里向山遺跡などでも同様の傾向が確認されている。その性格については1.木馬道のように枕木の痕跡と考えられるもの、2.道路の基礎であると考えられるもの、3.足掛け、4.自然発生的なもの、5.牛馬歩行痕の説が存在している。

今回検出した道路上遺構も、本来は土坑群の上面に路面が存在したと想定され、SD30で複数回の路面が検出されていることから、今回の道路状遺構も同様であった可能性が高い。また図化記録はできなかったもののSK3～SK5付近の黄褐色山に一部硬化した面があったことを記憶しており、土坑に伴う道以前の自然道的な路面が存在していた可能性がある。この自然道はSD30でも確認されてお



第22図 額見町遺跡道路状遺構図(望月ほか2006に加筆)

り、過去の報告では、集落再編期に路面改修が行われたと推定している。

今回検出された道路状遺構は、柴山潟から額見町遺跡に入る道であり、特に本遺構は潟から台地部へと至る登坂部に当たる。額見町遺跡の立地や手工業生産を基盤とする集落の性格から、潟に面して船着き場が存在したと考えられ、そこには人やモノの往来は不可欠である。あくまで推論の域を出ないが、陸揚げされた荷物の運搬を行うため、路面の改修が行われた可能性も想定できるだろう。

今後の類例增加や研究の進展によって、これらの道路状遺構の性格が明らかになることを期待して結語としたい。

引用参考文献

近江俊秀 2003 『古代国家と道路』 青木書店

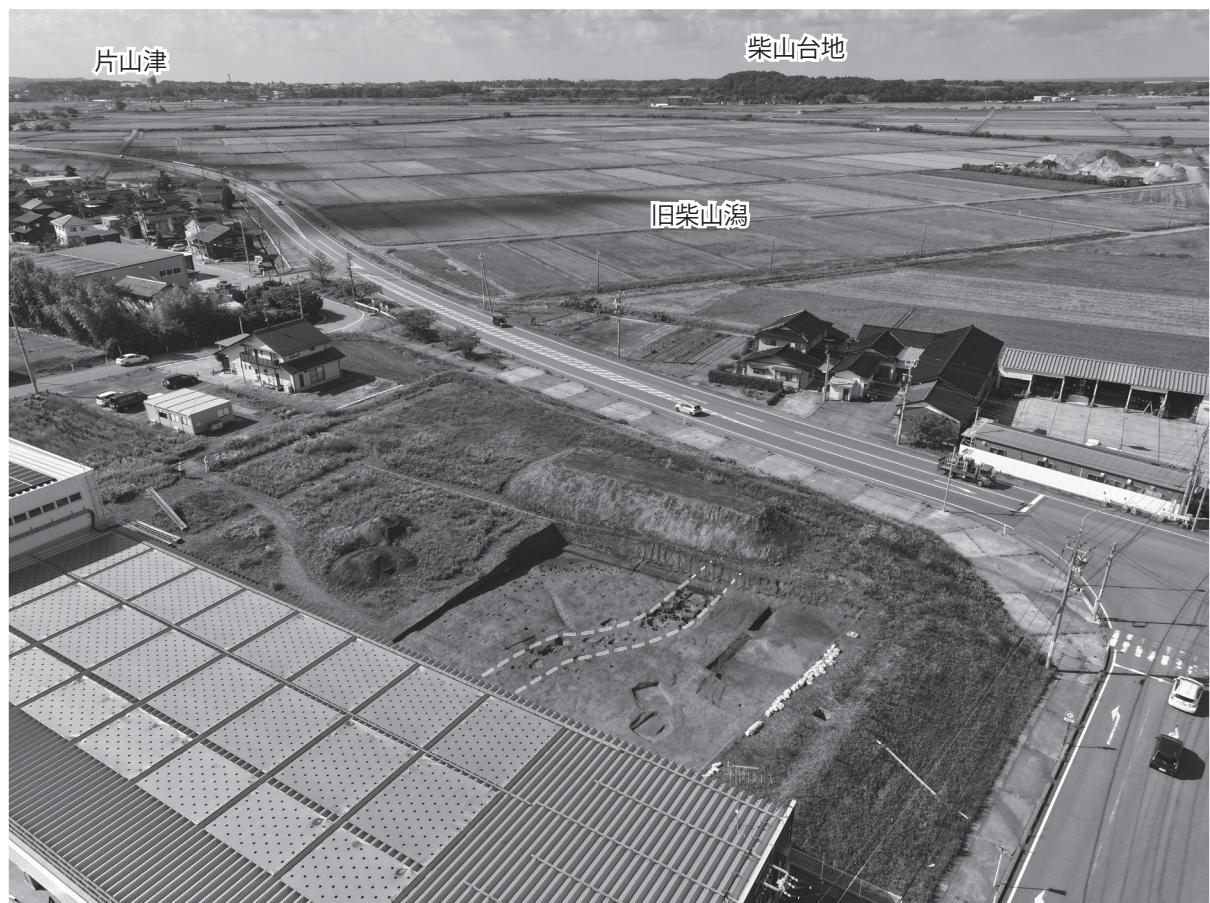
小松市教育委員会 2006 『額見町遺跡 I』

小松市教育委員会 2008 『額見町遺跡 III』

小松市教育委員会 2009 『額見町遺跡 IV』

石川県小松市教育委員会 2012 「二ッ梨グミノキバラ遺跡」『小松市市内遺跡発掘調査報告書VIII』

文化庁文化財記念物課 2016 「第3節 道路・交通関係遺跡」『定本発掘調査のてびき—各種遺跡調査編一』 同成社



第23図 今回検出された道路状遺構と旧柴山潟



調査区前半及び調査地全景（西から）



調査区前半全景（西から）



調査区後半全景（北から）



SD 2 検出状況（西から）



SD2 下層プラン検出状況 (北から)



SD2 獣脚出土状況



SD2 と上方の土坑群 (西から)



SD2 段状面検出状況 (東から)



SD2 段状面検出状況 (北から)



SD2 F - F' (1) 土層断面 (西から)



SD2 F - F' (3) 土層断面 (西から)



SD2 土坑掘方 (北から)



SD2 (4) 土坑底面



SD 2 完掘状況 (西から)



表土除去状況



作業状況



調査区壁 B



調査区壁 C



SK3(4) 遺物出土状況



SK3 完掘状況



SK5・SK6・SK7 完掘状況



SK16 土層堆積状況



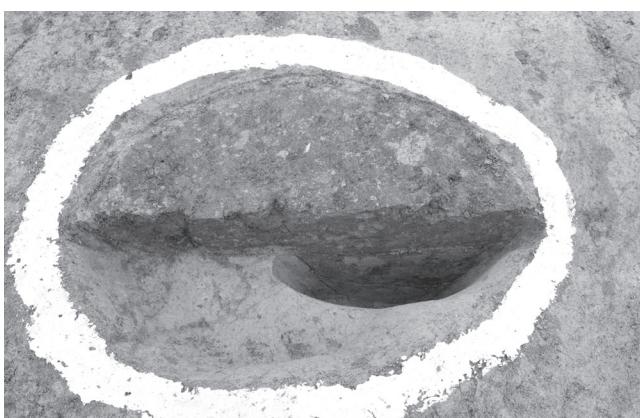
SK9 土層断面 (北から)



SK10 土層断面 (西から)



P16 土層断面



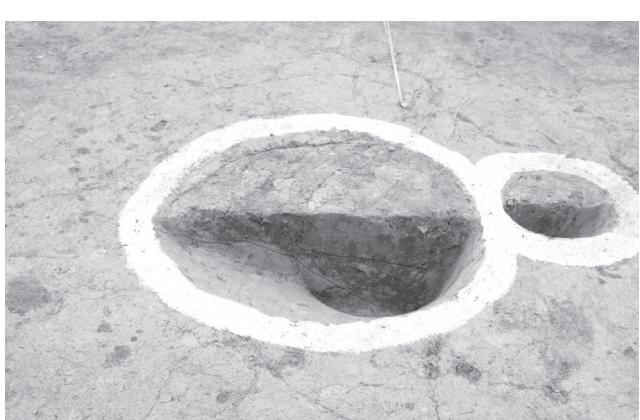
P20 土層断面



P25 土層断面



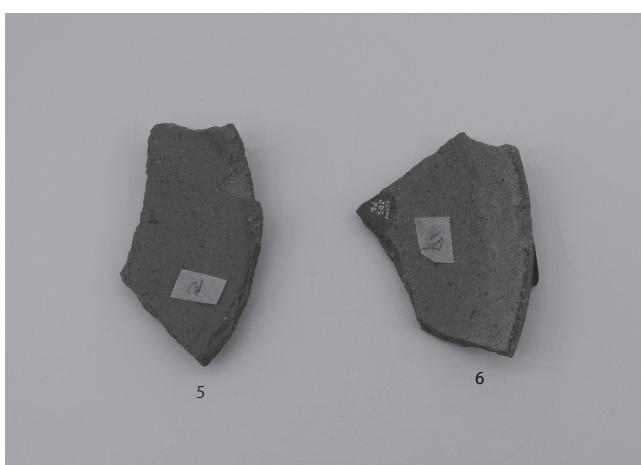
P40 土層断面

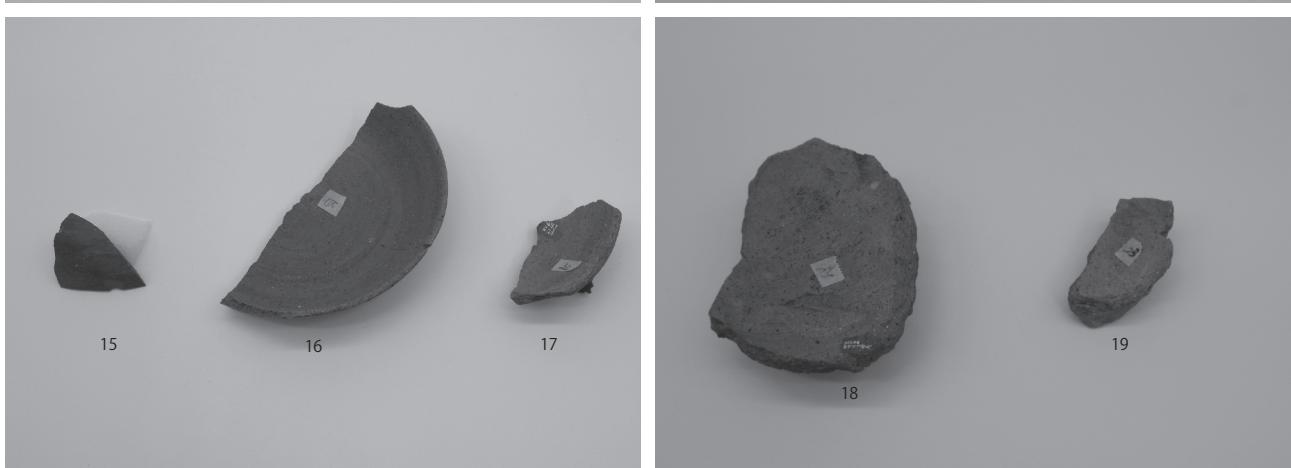


P41 土層断面



P47 土層断面





報告書抄録

ふりがな	ぬかみまちいせきはっくつちょうさほうこくしょ 7						
書名	額見町遺跡発掘調査報告書VII						
副書名	倉庫増築に係る埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
編・著者名	村上昂之、望月精司						
編集機関	石川県小松市埋蔵文化財センター						
所在地	〒923-0075 石川県小松市原町ト77-8 TEL (0761) 47-5713						
発行年月日	西暦2025年1月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぬかみまち 額見町	いしかわけん こまつし 石川県小松市 ぬかみまち 額見町	17203	316000	36° 21' 34"	136° 24' 27"	2023.8.21～ 2023.12.5	約1,500	倉庫増築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
額見町	集落	飛鳥 奈良 平安	道路状遺構・土坑・ ピット	土師器・須恵器	集落外へと続く古代の道路状遺構を検出した。
要約	月津台地上の古代集落遺跡。今報告分では、過去調査時に検出された道路状遺構に接続する道路状遺構が確認され、集落から旧柴山潟へと伸びる道の姿が明らかになった。				

額見町遺跡発掘調査報告書VII

倉庫増築に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

令和7年1月31日 発行

編集・発行 石川県小松市埋蔵文化財センター
石川県小松市原町ト77-8 TEL (0761) 47-5713

印 刷 株式会社ゲンダ美術印刷
石川県小松市丸の内町2-32 TEL (0761) 22-7031
